

紀伊國名所圖會三編

那智郡 一之卷

ル 4  
1833  
11



凡  
1833  
卷 //

那賀伊都勝區  
高野山靈蹤

# 紀伊國名所圖會

三集  
七冊



十四



すれぬらむをりりんえのまじり

を志起るふ識者の志し

志のせせふれにれんふさ

とめあつねに紀州名所圖

會とてたまきよ青霞堂のおま

此ありきり一巻若干ありき  
世小古の事は成を又一日  
加納氏其抄を集成し次丁  
世より日ら先母と予のしりし  
越乞小予札とてしりし紀伊國

序一

名一お小所からとてしりしあ  
と此ありの如し萬葉のしりし  
うは陶守の如しからかきし  
此とありの如しはりし事誰の  
名も同しきしりし事誰の

高野のくろくありて其の

と汲坐し

高野のくろくありて其の

のくろくありて其の

より集ぬ

序二

志と車馬

中

のくろくありて其の

のくろくありて其の

のくろくありて其の

きんかすくすくしり業ふるんぬ  
 こつしりれふるし架よ一古を  
 ふしはむねふるし志ころり

天保八年正月

右大納言原孫出



兼和十二年解所押  
紀伊國那賀郡印

仁壽四年解所押紀伊國印  
同解所押紀伊國伊那郡印

紀伊國名所圖會二編卷之一目錄

岩手大宮 岩手驛  
 庖廩神祠  
 大日寺  
 東坂本 根來郡  
 増芝 第百廿四  
 羊宮  
 妙見社  
 中宮  
 明善誕生地  
 安國寺  
 金剛寺  
 權現寺  
 關伽井寺  
 古市辻  
 西方寺  
 土佛宗  
 春日川  
 若宮八幡宮  
 鞍懸松  
 鎮守社  
 良禅誕生地  
 大磯虎車塚  
 奉成故居  
 傳法寺  
 總堂寺  
 船津社  
 孝子勤郎  
 鴛鴦川 意看菖  
 國分寺  
 倉谷川  
 山王權現社  
 田中井戸 山吹森  
 植槻森  
 和田城墟  
 福琳寺  
 延命寺  
 岩手里 岩手驛  
 安樂寺  
 白山社  
 白鬚堂  
 裳裳坂 三保  
 常樂寺  
 若宮八幡宮  
 一の宮  
 邊土村 極樂寺  
 春日社 城廬  
 海神社 海神池  
 薦坂作

櫻池  
 大本紙  
 風森社 風布表  
 船主故居  
 藤の井 藤の井  
 五平松城  
 周嶺山 嶺岡山  
 御所芝  
 陽山  
 鎮西滿隆城址  
 釋尊寺  
 將宿桃  
 志野神社 小竹行高  
 長田觀音寺  
 恩賀故居  
 伴益継故居  
 中津川 前鬼末裔  
 粉河町 鳥井坂  
 天照大神宮  
 祇王舞回  
 若一王子社 黒箱  
 奉山大神宮  
 馬宿村  
 名手社  
 笈地 柳宿  
 藤の井戸  
 帝釋寺  
 八幡宮氣鎮神社  
 中津川宮  
 粉河町 粉河町  
 玉垣菴  
 富士崎  
 光明院  
 宇野氏城跡  
 穴伏川  
 東屋峯 金松  
 猿引  
 中山寺  
 誓度寺  
 大入足跡  
 粉河寺 四所  
 鍾恒行宮跡  
 高野辻  
 名手川  
 至一人誕生地  
 名手氏城跡  
 永津故居








岩手大宮

新敷  
 えぬひと  
 いさか  
 いづの  
 いづの  
 いづの

三ノ

天ヶ井

山手

三ノ

岩手大宮

岩手大宮村の岩手大宮  
氏神あり境内廣く社を接樹多し

本社 三部大権現 熱田大明神

例祭 六月七日九月十二日  
十一月は火燒結

あやあり又八月晦日乃衆丑朝一齊刺し一神事あり其式ハ神一人御置一人  
本権つひる大権とてお社の神体一ニ小並びて多層を敷てそれより左右  
小のり上ハ下井坂村境見乃狭間下ハ吉田村の一をねと一あり各十村をうし  
社地地の勝ふは波野の石津傍の民戸小並ぶおれ端と悲清さ一ひは長所  
とて必靈驗ありとて府下及近々の細素敷集して置とる  
社に多くお社の間より教人充満一遊説して眼を固まり社と  
本社左より ○鳥居一基 ○拜殿 ○神樂所 并 御供所 本社右  
六神合祀と ○鐘樓 本社右 ○玉塚 本社右より真教大  
本地堂 本社左より砂當 ○鐘樓 本社右 ○玉塚 本社右より真教大  
御供所 本社右

社傳云熱田大明神ハ日本武尊を尾張國より勅請し上  
古ハ社地の東熱田森坐しは中古以降此地一遷坐  
一移りて 其舊地今一細あり津原附神と稱し神主 舊社ありが小世俗  
里神とも稱して崇敬はとて三部大権現ハ真教大師上人高  
野山一在し時密教を弘めむが為小傳法院建立の志願を

記して西國小趣むむとて城州伏見乃稻荷社一詣でたる  
とれ遠約を止め早く紀州一移りて紀川邊ありて必  
救むるを得べしとの神託ありしを尋ねりて紀川邊を  
過るに果して岩手社の寶券を拾うに於ても送る  
を拾へるは快くこれ中略より傳りて東寺の門に  
榜して券主代券アリ小符を券主代券ありて是をば  
券と還ひしども或歎して文を還し岩手社と上人  
に寄附し其志願を賜けむとて清々下司職にか  
りぬ 徳網集元亨親書少もは事んる同集和解と按むる券主代券を  
山正學房上人覺鑊傳法供料乃至代可勤也奉爲高野  
供之狀如件大治元年西月七日平爲里判かくて大治元  
年根來寺の伽藍を創せんとして先當社と建て六十餘年  
神と勅請して根來寺の鎮後とをり然るに豊右衛門南証乃  
兵燹にともも社殿の社殿及金剛童子堂籠所室藏等附伏





記録等垂灰燼とかりて春來此一夢ありわつと昌平の  
御代に遇て再建造營一寛文九年に境内殺生禁札を給  
つて日小そく多々後信仰浅く大社の形や備せり

六箇堰

堰は清み村の靉岸あり紀州を堰て數百石の田畠を灌ぐ此堰は  
廿間あり下にはありしを屢洪水れり破れせりをりて天保六年十  
一月官辨を據り今の堰に改む此地下豈石して容易く水抜しりし  
因う救むれん歩を以て當石凡十五間あり穿りて堰はとて遂に百代不易  
乃大堰

天龍山寶珠院伽井寺

同村よりあり  
真言新義

本尊阿彌陀佛

寺尺八寸の立像小  
て聖徳太子此所作

當寺の縁起よく今むし弘法大師勅撰僧都小從  
ひく取用持の法を傳へ此地におつ多修りたまふ時  
靈杖を以て自開伽井を穿り終り尚寺に即大師修法の  
急地にして此里の名を清水と名づる多修も急此開  
伽井乃清水によきりかゆ靈水されを根來山禁業の

以一山の法用れあ皆此井より汲むて日々にとびと  
い傳へ其井今も村中小りて水清冷潔白くして寒暑  
少も増減とれず又田園中亦一此寺石り勤操石  
と号く是則傍乃急跡して種々の傳説ありと之り其  
側小享保年中日州の沙門法印憲勝一小碑を建てり

銘云 大師一穿 經九百年  
歡喜池水 惟茲井泉

密教山觀音院總堂寺

同村より真言宗新派今大に廢て本尊十一面  
觀音本像にして古色あり境内亦古碑一基あり天文

岩手里

六年十月廿八日刻む當寺に無教大師の草創して  
根來山附け出の灌漑修儀のとて宿坊とせりとぞ  
八雲寺抄云祇園分教撰名所集藻塩草と  
本園の名所と云岩手庄中と云り

新續古今 夫木 日  
よここのいふまのびにたせよりのと此里の名ととせん 從三位爲子  
はか此岩手の里にやまふされ候よりやまづを祀らん 後一條院御製  
されぬと岩手里のいももあそきてまゝ白上梅夜 左近中将具氏  
こそとんばはねり及も候はつりて此里の山吹乃これ 主人あは

隣女集

南都五百首哥合

17

山吹のうらぶれ里のまよりやわが久乃花小く人 隆 信  
思ふもいふれ世もあつてむき世里のいとやまが 雅 有  
はるれあまのまよと山吹のいとこの里にまやけら舞 前中納言具氏  
うらぶれとともいふれ里の名と花はなせり山吹の 権大納言為尹  
白河殿百首 爲 教

岩手驛

疱瘡神祠

岩手驛 岩山より四里南沢より名子三里元和年中侍馬所より村中一軒子の  
小祠あり昔時竹房より知徳と毎年十二月廿六日地一り市あり  
疱瘡神祠 備前村より古俗曰某年正月廿二日の老婆あり此村乃大西氏小妻  
て宿せんて成をふ家主の曰我妻よりて進むと食物けりて地一り  
老婆は老が老に老い老い我をむ所より二宿を乞ひて家主許さる  
とをぬんとていづ主人の芳志感とて小塚より我ハ疱瘡神あり移り民庶を  
とくんとし且汝が舊紐一縁あり今又汝が篤志を感るるより今より後大西の眷属  
と稱せん者ハ末世まで疱瘡ありていづれんとていづれんとて去る大西氏  
そく思ひて送る今これ小祠の地あり消失ぬよりて瘡神と崇む

古市辻

船津社

古市辻 荆本村領より四辻の交をいふ此地ハ昔金屋より移りた移りなり根  
船津社 周田村より所あり古市とて東西南北乃まろ石と連り  
古老傳云當社八幡大神ハ神像鎌倉より流る來て此地尔

とまもりたのうまハ田廊舞臺龍堂宝藏御供所亦備り  
と社領も若干ありてとせ

安樂寺

二乗山小傳法院大日寺

安樂寺 同村より根來寺本尊十一面觀音 鎮守 白山権現 梅樹 古木より  
二乗山小傳法院大日寺 水榭村あり真言宗 本尊大日如來像 鎮守  
寺の後より ○泉水塚 門前より泉湧上人乃母堂妙海禪尼火葬の地あり  
今ハあり ○石塔 寺の西に開あり母堂の石碑あり長五尺 ○廟 寺の前より妙  
埋め上人より小祠を建り一樹茂極く其 ○什物大日二尊画像 寺  
本花壇に安んじりて古木極く又サトウあり

春日明神社

春日明神社 寺の東より祠あり  
寺傳云肥前國府知津莊總追捕使伊佐平次龜元の妻橘氏ハ  
覺鑿上人乃母なり上人一度家を出り諸國を經歷し揚と

高野山に留先後根來成創造してとて母堂此を慕い  
逢り當國小妻れども根來ハ女人結界の地也して上人乃妻



図  
表

舟津社  
大日寺  
安樂寺  
薬師寺



室よ入るれば上人と知りし此小庵を繕じて母を侍  
せ村中此意家六人の命とてこれに侍らしめ給ひ園寂の後  
其地を淨刹とて廟を建て塔城を築き六人を度し僧と  
かしく永く香花を祈り給ひしより堂宇是成其を  
天山乃兵燹に悉烟の末に消え今露乃かすみを  
せり

蟹谷山齋幢院西方寺

同村山齋一りの真言宗古刹也  
名草郡出水村の齋守号を乞ふて再建近年  
又修葺して堂舎壯麗なり  
○什物 又緇紳家乃古書画を  
又修葺して堂舎壯麗なり

孝子勤口郎

困中孝子多し一洋小南紀  
忠孝傳小るる今畧し

南海遺稿云

勤口郎者那賀郡宮村民也齠齡喪父事母至孝貧無田宅寓  
居里中一廬當距廬六里餘僕役村家晝以服役夜輒抵家省  
母如此十餘年無敢懈日年過四十還家娶婦生一男居二年  
窮益甚迺與其婦謀相別居奉母既老且盲躬亦患聾時  
傭作以爲活雇主每爲設食輒受而不食必盛之一器持歸以

饋母餐而後始餐凡其在膝下多方承順莫不罄歡鄉隣  
其窮相告以賑濟郡縣具狀以聞公府命有司母子終身  
不識丁之米四石并命且錄其事以表章嗚呼夫勤四郎目  
秋其艱如此其勤可謂慈愛忘勞者矣孔子所謂難能者其亦  
庶矣哉世之士君子學術有餘安居飽暖不顧其親者於其  
亦何如哉勤四郎年已五十有八子曰才次郎年十四其母時  
年八十歲今年實享保十年也云

白山妙理大権現

白山村の氏神なり

末社

古碑一基 正平十四年十一月八日

傳云長承二年覺鑲上人就前園白山権現を勧誘し社領  
を寄附し社殿壯麗なりを根来寺ともいふ長くあり  
祭礼の意暇今も根来山中祈りにありて古のさむ想像  
とすべし

東坂本村

根来山の東坂本村として西園禪院の遺蹟あり根来山の入口に河  
孫池弘の碑あり天正十一年とあり西坂本入口あり河孫池禪院の  
碑あり天文二年とあり其地根来山中ふた碑あり

うらひをのめ給ふるる山路なり

道通院内府紀



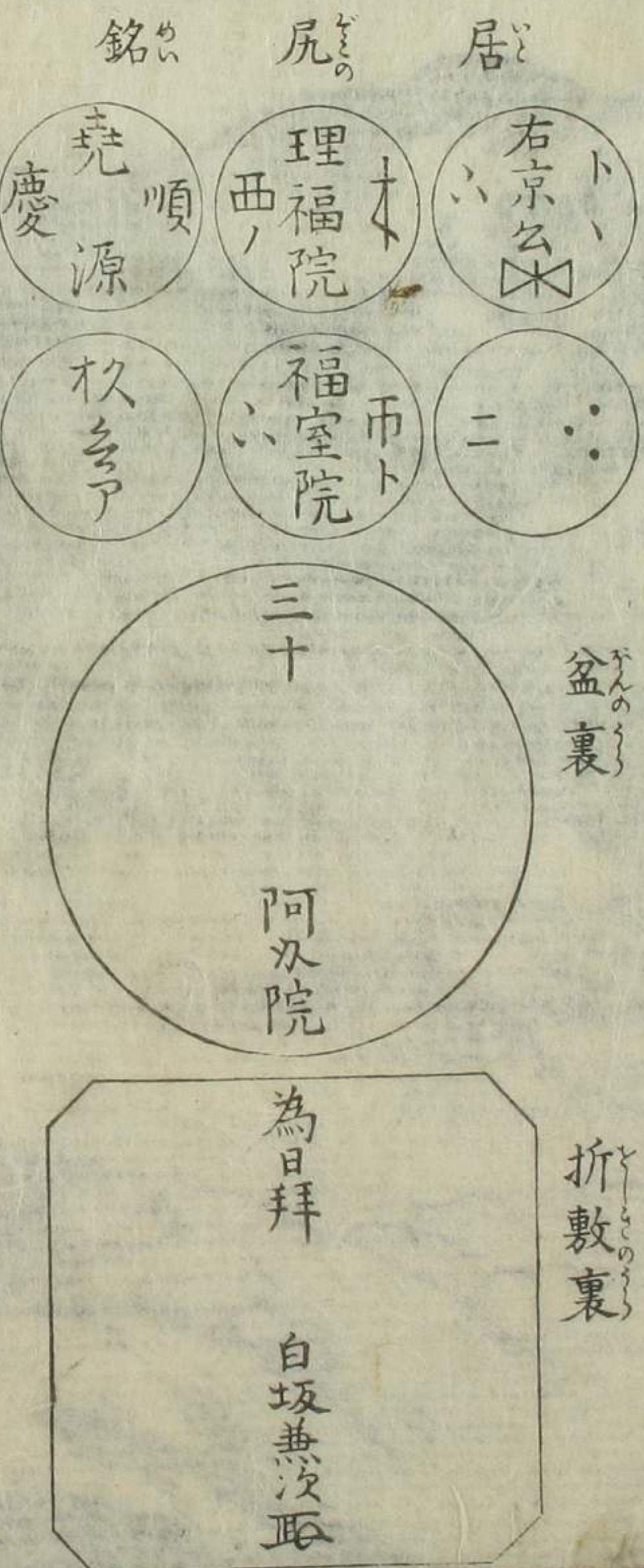
△

白山権現  
遍照寺  
三部明神  
金輪寺



三編一ノ九一

根来院 仲右根来寺の聖母なり一時山内氏の改め又尚村或ハ西坂寺なり  
 居尻号ハ天正年間の銘跡不詳一ツの以テテ製セテ詳クハ同中城是云  
 此以見明と内ノ右系公とノ銘ありテ其ノ天正十三年の賣券文ナリ  
 東壽院内右系公とノ銘あり東壽院ハ根来菩提堂内ノ院名ナリ銘文乃右  
 系公内人ナリと云々一銘ハ天正以テ製セテ亦勿クハ居尻の銘一  
 二列小載次



根来彫 彫箱又根来小多一古抄中  
 左甚五郎 或書云甚又希ハ紀州根来東坂寺の産なり根来近至リ甚五郎  
 師の内見乃産あり寛永十一年ニ遊ヒトハ此人根来盛あり一時の彫物  
 左字心左勝政乃名あり

紀三編一十

土佛 同村の小尊像中ニあり味中ニ三十丁山中加持水ナリ早魁少も圓也  
 産物畑牛房 善領深田押川今畑中畑牛房と云々遊畑畑牛房と云々大ノ賣券を  
 東坂寺ハ此ノ畑牛房と云々遊畑畑牛房と云々大ノ賣券を  
 畑牛房と云々遊畑畑牛房と云々大ノ賣券を

鴛鴦川 東坂寺ハ此ノ畑牛房と云々遊畑畑牛房と云々大ノ賣券を  
 畑牛房と云々遊畑畑牛房と云々大ノ賣券を

堀川百首  
 東坂寺ハ此ノ畑牛房と云々遊畑畑牛房と云々大ノ賣券を  
 畑牛房と云々遊畑畑牛房と云々大ノ賣券を

古碑二基 同所不勅堂の例ニナリ  
 銘 建徳二年霜月廿四日 大願王庭堅

意看翁墓 押川村西小山林中ニあり  
 翁ハ勢州度會那性柄在東宮村の人少クテ姓ハ千葉ナリ代々  
 東宮村ニ住ル者少ク東宮氏トシテ歎学成リテ駿河藩ニ奉仕





元和以後此地を采邑に賜る爲此地の勝景を賞し之を  
仕乃後小庵を卜築して花をみらにん紙を巻て老を  
了り且遺玄して死後此処に墳墓と築く其祥世の歎とて

妻の花秋れをみら乃りしをいふも是もつる妻のゆは山嵐

白鬚堂

押川村の東今畑村に六本ありといふ者あり白鬚堂といふ元祖は依り本ら神  
頼朝より法代を山に命ず依り曾孫を文右衛門義貞といひ始てあり  
して南地間武名ありともそ子孫傳たり民より村中氏神の末社白鬚明神とい  
ふ縁の起る所として昔近江國より勅傳し某天皇より賜る旗及陣具をて林神  
といふ其家地元元年の勅書元弘建武乃御書書三十二通を藏せり元禄年中  
失して今ハ古家御書なり元弘建武の文書ハ村名を茅畑といふ一永徳の文書ハ  
今畑といふ其一二をたよかり

新田義貞以下凶徒誅伐之事所被下將軍家之御教書也  
於于御方被軍忠者可引恩賞之状如件

建武三年十月十七日

源國清 判

茅畑村白鬚一黨等被軍忠上者於更後諸方之給至公事  
等悉可停止者也依將軍家仰執達如件

元弘三年八月十八日

左少將 判

塔乃芝

岩如塔をたつて長方  
十丁許西園分村

田畝の間は在る方一丁許乃芝生なりつり勝地を簡定  
して建る所の園分金光明寺に廢跡あり今ハ弥勒堂大門  
鎮守拜殿等乃址のま縁小砂土り中はを大塔の礎石依然  
としてつり梵唄響絶々牧笛奏起る若木の懸糸後へり  
次此あつりに布目つる瓦砾乃若乱を海をみて當時を想  
像也

延喜主稅式云

國分寺領二萬束

三代實錄云

元慶三年二月廿二日壬午紀伊國金剛明寺火堂塔坊舍  
悉成灰燼

園分全別明寺村ありつり成さして  
妻されはひらりははる野もつてさる下けの草もさる 首麻呂

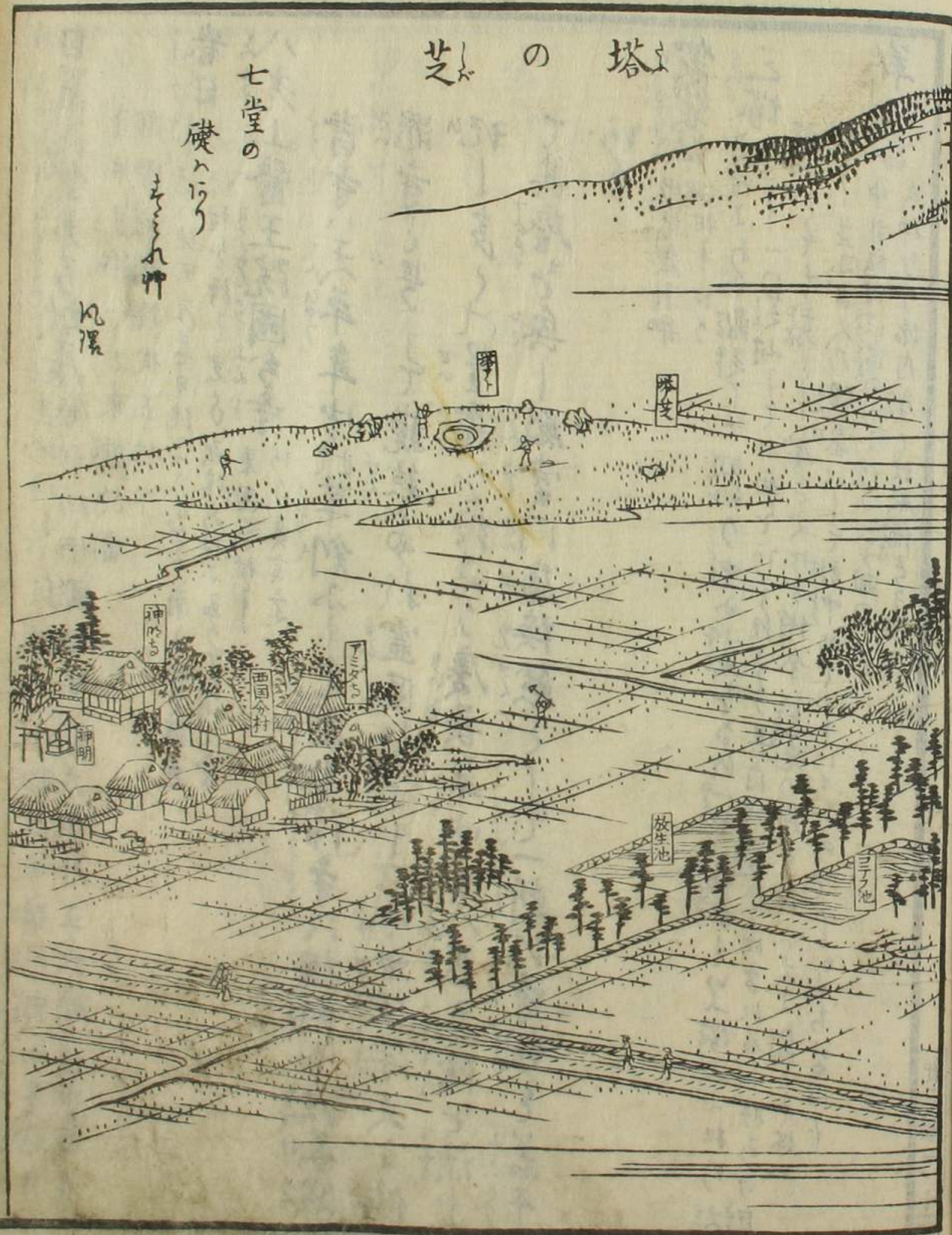
芝の塔

七堂の

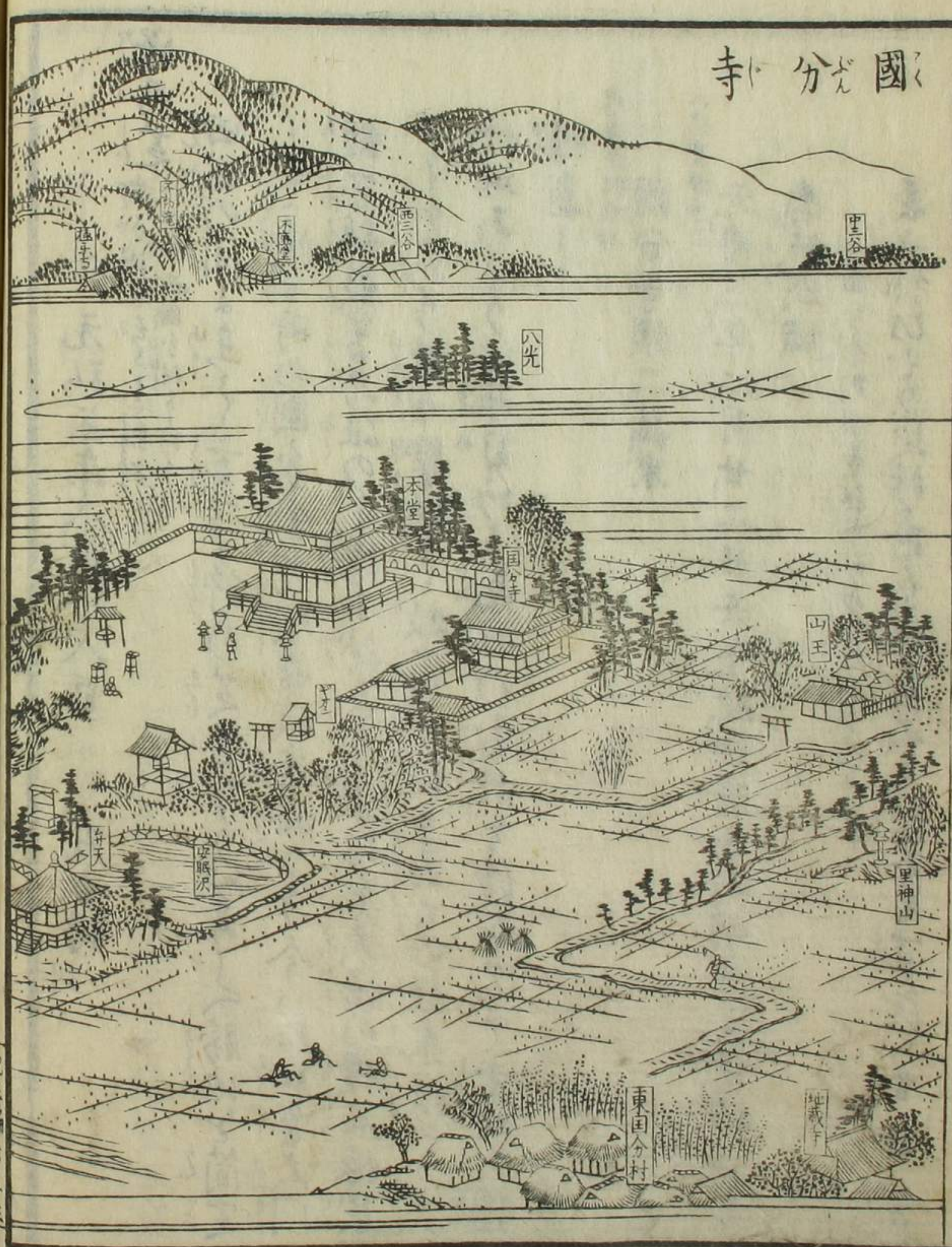
礎のり

きん九神

凡溪



國分寺



日置毘登弟弓故居 其地洋あり 續日本紀曰神護景雲元年六月

登弟弓 一萬束獻於當國分寺 授從五位下

春日川 俗村を流る 岩子庄清の村ありて紀川に合

八光山醫王院國分寺 東國分村より 真言宗

當寺天平年中此草創小して園分僧寺に相對し法華滅罪寺と号して魏然多於靈區に中世棟宇大に傾圮多く此星霜を経る慶長年中去人等高僧を請て其廢を與一殿堂門廡煥然として一新以寺領を若干

製袋坂 田中庄下村

三塚 同村あり 鼎鑿して町畝なり 中水丘をうん一と名けり 堀江の村あり 其内茂く一四方に石を積あげ巨

羊の宮 中井坂村邊の少ありて六ヶ村の氏神なり 境内廣く社殿備き

田中庄中に意社八祠あり 澆り田中八社を稱次當社も

其一めして末の月日守護神坐せば正月九月末の日を祭

日々毎月末の日小御供を備ふ 神主を石井

若宮八幡宮 尾茅村邊の傍あり 六ヶ村乃氏神田中八社の一なり 鎮坐の社殿に於て祭祀も多し 神主社人等も

倉谷川 海上川ともいふ 源ハ葛城山に佛崎より出く 葛山田登尾の六ヶ村を経て 紀川に合流 此川に温泉あり 今ハ冷水と

惠福山觀音院常樂寺 花野村より 本尊正觀音菩薩 長一寸八分 觀音大

といふ相傳あり 田中庄比叡山乃鎮地なり 附尚寺より 二丁より西に七堂

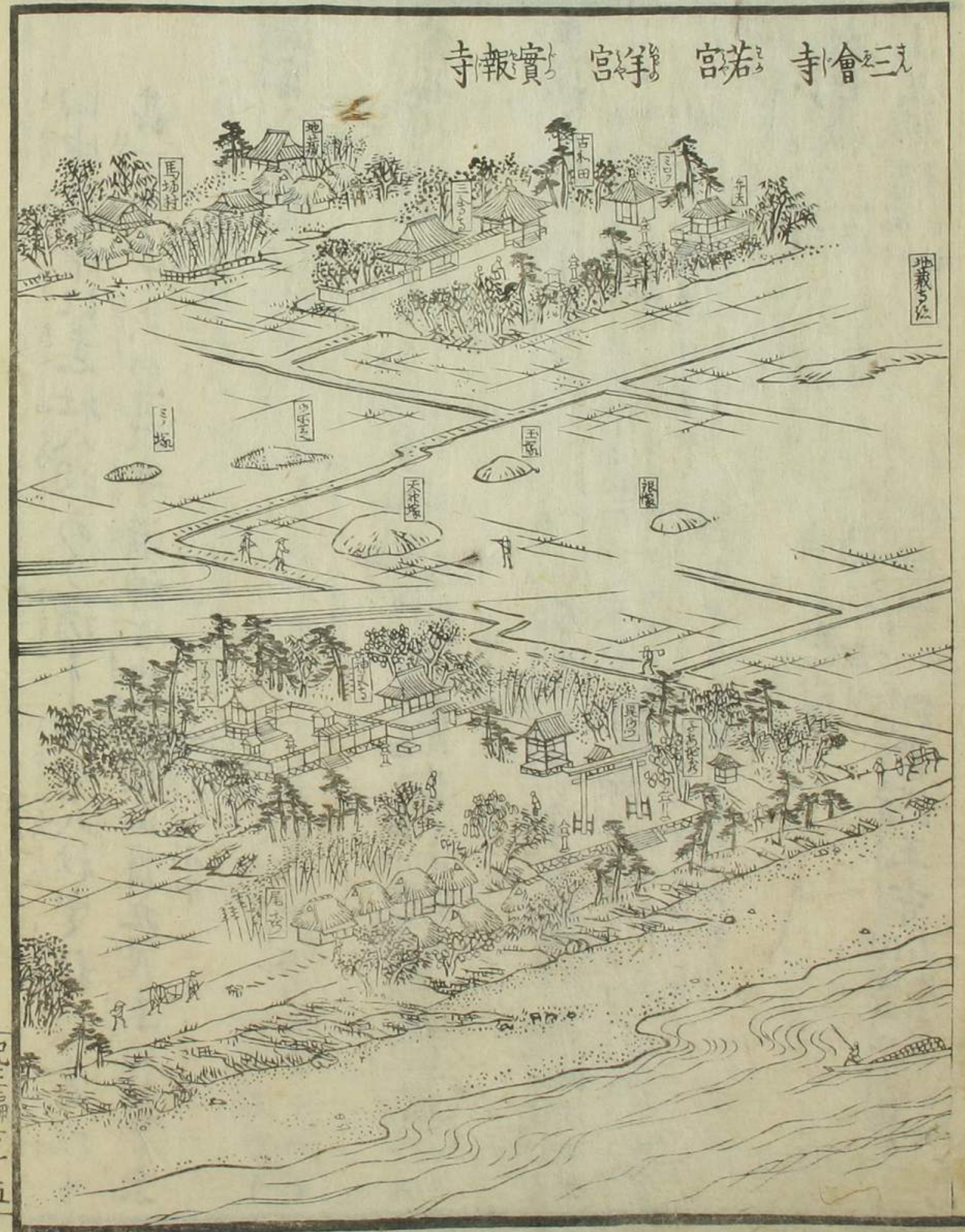
妙見社 上野村より 田中八社の一

鞍懸松 折田村より 三丁地あり 大塚の虎懸松あり

山王權現 同村より 十二ヶ村の 例祭 申日 別當山王寺 法輪山一系後と

氏神田中八社なり

別當山王寺 法輪山一系後と 号次真言宗



神寶太刀二振粉川國鼻高龍頭古色

社傳云淳和天皇天皇長年中慈覺大師救命を蒙り近江

國坂本より初清せり其後此地八王子に御寄附ありしよ

に社殿も辨じ杜齋にありぬ

源平盛衰記

堀河院の御宇嘉保二年山門の衆徒お辨状を據り敷

辨しけしむ時乃國白師通公中務丞頼治とい侍を

召して只法に修せり防之と作合しきりれば其病を

蒙り神民六人死にる者二人云く去程不國白殿の御爰

に比敷大藪崩る御所みかふと覺え又東坂本此方

より鑄矢鳴來て御殿の上をえや思ふ是より於昂吉侍

をててんせしれり是に渡殿の狐戸に匣子付し青

柳をとりてるを不富め是國白殿の爰もうつも山

王の侍崇忍ろく思ふ事終りに御頭のさつふ所を

瘡出來させ給へりと披露あり牛馬街に馳遠い興車門  
前に多一父大臣御母儀お政所御款を斜りけかづく  
御祈も心なす云く託宣いさうも遠らせ給ひ御腫物  
愈させ給ひて御心地本復させ給ひれを紀伊國田中  
莊の殿下れ渡り給るりれども八王子小御寄附あり是  
に國々同善濟とて今も退轉あり

若宮八幡宮 中宮 鎮守社 並同村より田中八社の二から

田中井戸 松葉集原塩草木に當國の名所とて窪村の東に五丁許に草おどおいて

長き竿をててうらに底ひれがうら泉の堰をてて懸あり人老を

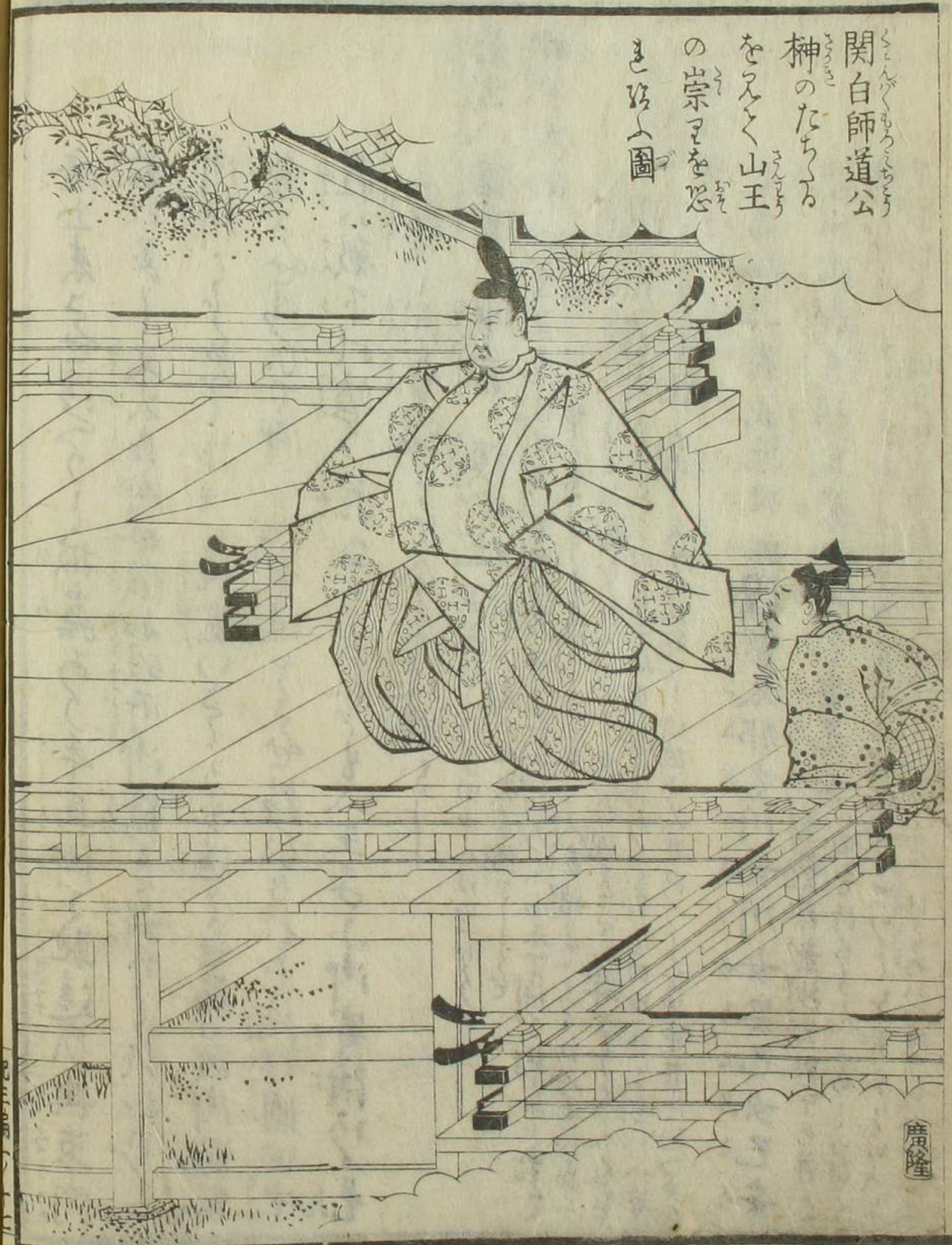
回中井のまじり又これあり復井といありを田中井といひ皆

備馬樂 太名加乃井止亦比加禮留太那支川女川女安巳女巳安

巳女太利良利太奈加乃巳安巳女 八田をけりてんふあといひ

池をけりて水をあえんてをかり其め成田おすを井戸といひな

まあめさ八田よりるわたりと葉るりけりてあこけりてあいのち女といひ



関白師道公  
 神のたちを  
 をんく山王  
 の崇を忍  
 玉路入圖



民部卿為家

家  
 田中  
 井戸  
 なる  
 花  
 いろ  
 夕  
 う  
 う

三十一



田中  
 井戸  
 1

廣隆

一 備馬の解云田中の井と八田のわづらふり井所と又水を引堰所とて  
もつる一むらさきハチのたをいふ又柴もはやくめけりやあまふ  
いふあまふむらさきハチのたをいふ又柴もはやくめけりやあまふ  
いふあまふむらさきハチのたをいふ又柴もはやくめけりやあまふ  
いふあまふむらさきハチのたをいふ又柴もはやくめけりやあまふ

續古今

續十載

白雲おろすのどし絲うらひさ田中井戸の秋風を吹 入道前大政大臣  
兼こむ田中井戸の秋風を掃葉城のそとを鹿ぞ鳴る 圓光院入道前關白

夫木抄

蛙う田中井戸小舟いれてわづらむらびく風もはかり 寂蓮法師  
ふかま田中の井戸にたゞそそ垣不城めつ井のむらむら 爲家

家集

抄たて揃さるばるの事もさる田中井戸の八月ぬり次 小侍 從  
まきそいせさるわづら苗代田中の井戸もさるさる 爲冬朝臣

草根集

房う田中井戸よおそのつらも掃葉城のむら秋れ 正 徹

山吹歌

續古今

候はう苗代あふ秋をそそ田中井戸の山吹のそ那 待賢門院堀河

一の宮

竹房村よりつこて 別當一宮寺 真言宗成童  
村乃氏神なり 嚴山法蓮院

明善河圖梨誕生地

河圖梨の今申 山放光寺 竜藏院にて真言宗成童の寺あり

縁起よ云昔弘法大師河圖を経歴して歸山乃時此地の川  
向小堂一字を建立し河字と親善像成安並し其色は井  
杖をたてて予が法を與さん此里に生るべしといひ遺し給  
一ふにそ河圖一うらび二百年の後果して明善河圖梨誕生  
せり河圖梨年纔二十一にして高野山に登り明年祈親上  
人下隨く難發より長曆三年弘法大師親向あり師資其小  
拜瞻して中院を再興以後大師又室中より現を是小堂一  
室を攝ふ是成親向のるしよ尔後明善師滿仲公乃男耕  
王寺の頼尋に從く廣沢乃法水を汲む又小野成尊僧却  
よ就て本山乃法堂を推ぐ是を中院流といひ寛治四年授  
に任ど治山十六年を経て嘉承元年十一月定中少僧一物  
焉とて任を附小年八十六一心院善提院の塔下に歎に  
南山此密教教然として中興をうりのい備小此師此力ありけ



地系神崎村といひしを河國梨の村杖より累々うると  
しく生むる以て多神崎を竹房と改名し終りかた  
大徳乃証生の地とさればとて後年荒生利益はるふ里人等  
當寺を建てる信作多し次とふん

元亨釋書云釋明筭姓佐藤氏紀州神崎人年十一登高野  
山翌歲難逢隨成尊法師學秘密法初金剛峯寺自從營構  
之始至此已二百餘歲院宇廢頽密學疎荒筭懺念持明之  
宗依正俱替苦修勵學度邁倫儔未終十年兩部職位諸尊  
軌儀無不貫穿南嶺密乘再興者世推九於筭嘉承元年十  
一月十一日寂年八十六

良禪河國梨証生地

高野山住生傳云檢校阿闍梨良禪紀州那賀郡神崎人也  
俗姓坂上氏云永承三年戊子誕生其後隨中院阿闍梨  
明義受兩界灌頂保延五年化歲九十二

植槻藪

所の茅葺と稱すは元中の中櫨の本と稱すは又此  
の秋にさかすは植槻の村にありて古時就田のさかすは  
同し執りて植槻の村にありて古時就田のさかすは  
和國無位田中社從五位下とあるはさかすはの村にあり  
此村の民は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

邊土村

此村の民は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

邊土山地藏院極樂寺

此寺は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

什物辨財天像

此像は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

五十三人碑一基

此碑は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

安國寺

此寺は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

安國寺

此寺は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

奉尊河彌陀如來

此像は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

放生池

此池は行基の弟子に傳へられたるはさかすはの村にあり  
後代傳へりて今もさかすはの村にあり

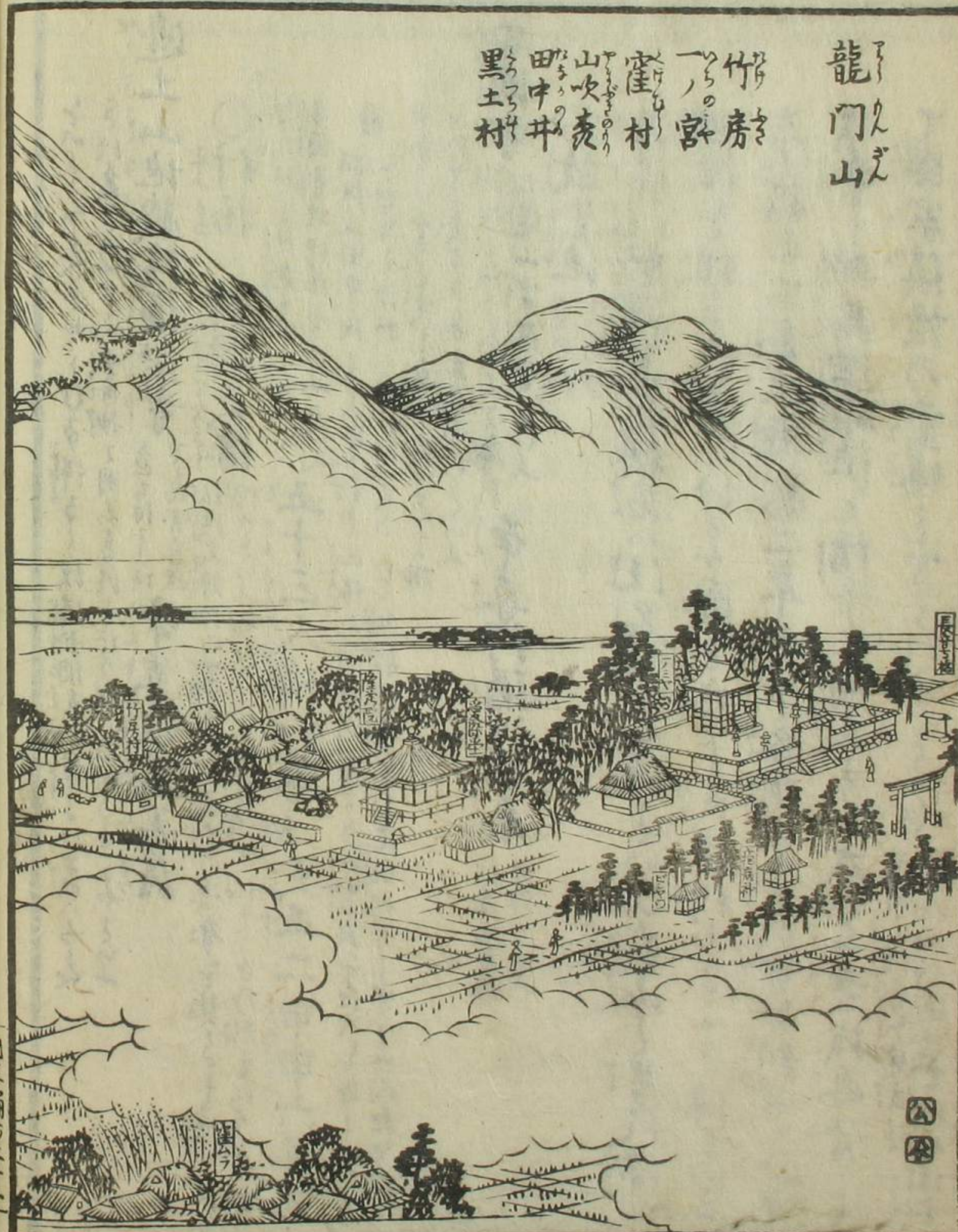
左清門智源直義朝臣は法名を惠源といひ右山と号し法  
佛法を信しけりけり國を安し民成利とるを佛意と  
まふべしとて竟小曆應二年天下各州に安國寺を創めん  
以奉即高僧碩徳を請して開山とて或は右寺改再管  
て國家鎮瀆乃靈場とせり

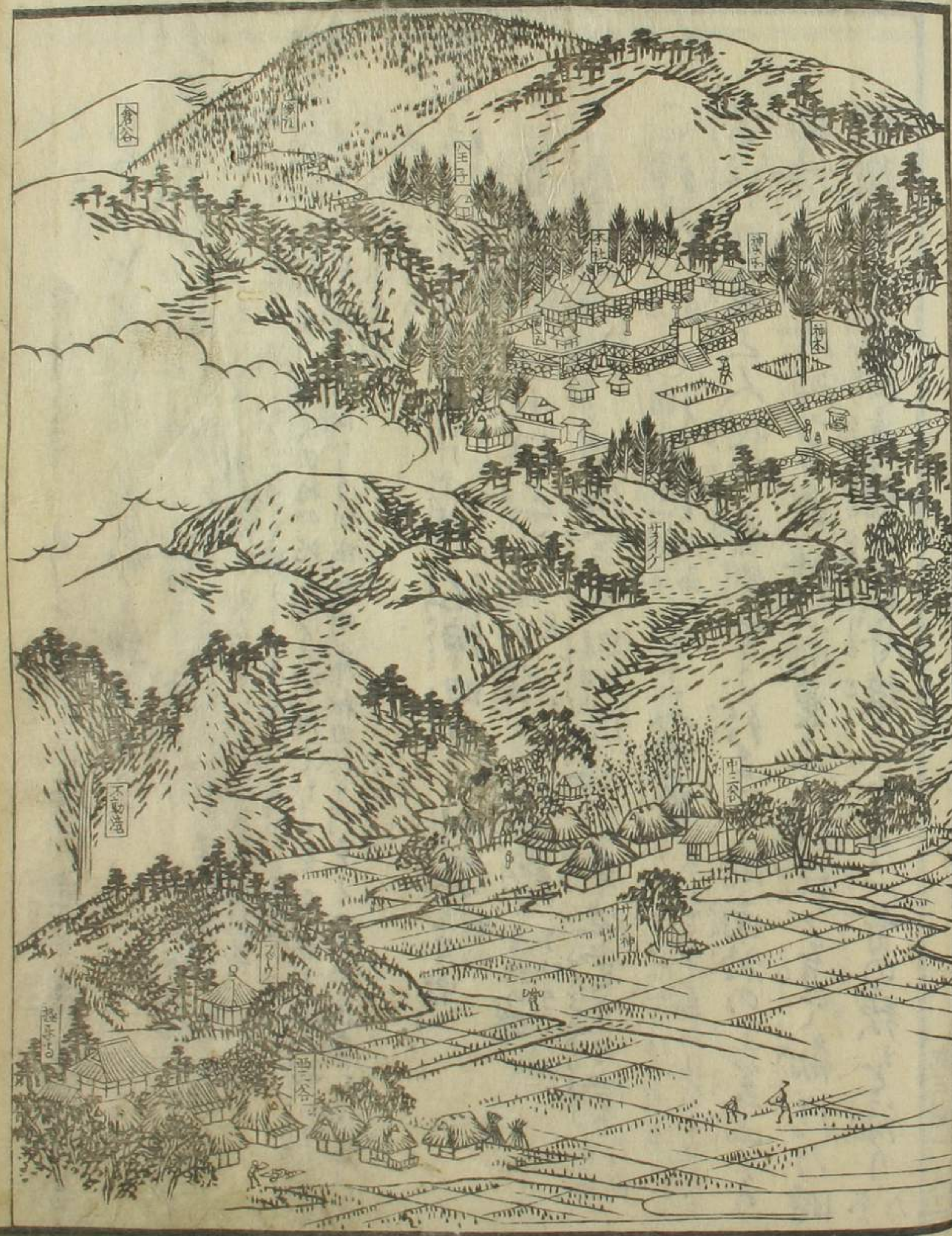
備國一精舎を建てる  
可和合運換業標樹樹

紀水東頭八原峰  
 関南為許小芙蓉  
 雲暗四國開眞面  
 雪掛中天露冶容  
 仙榻苔紋經歲古  
 靈池劍氣射波雄  
 登臨賒酒山家興  
 萬里風煙入竹窓  
 橋山散人

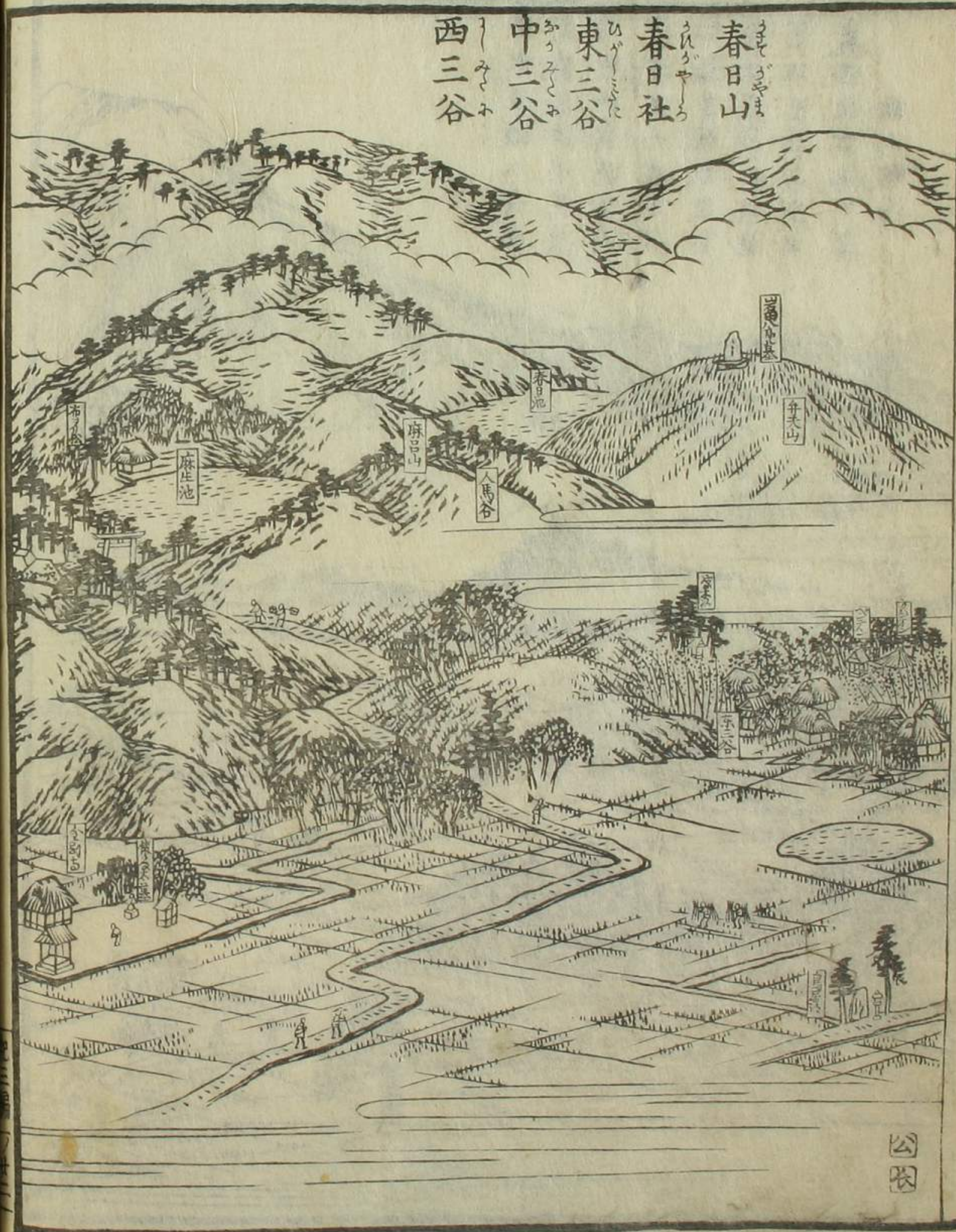


龍門山  
 竹房  
 窪村  
 山吹  
 田中井  
 黒土村





春日山  
 春日社  
 東三谷  
 中三谷  
 西三谷



傳おんちどおんもおん 當寺も其一めて園分二寺に齊く盛つた精舎

あつとつとのの以よりかく顔度なり

大磯虎車塚

小大井村より今よりほらて塚の形なり小石佛を好む我見亦父の敵工藤祐徳を討たしは時宗乃妻大磯虎車塚あり慈母の海

和田城墟

和田村乃御皮田村の地より今畑とむる東西南北の形あり三傳一又村中小五家

春日社

中三谷村の小春日山に於て神なり 祀神四座 例祭 九月中

若宮

雲押 小祠三社 龍王 檜 神樂所 本社の側

鳥居額

明惠筆甚 神宮寺 春日山延壽 本地堂大日堂 乃側

神本

乃側 神取池 神本 すみの處 小名森塚内より明惠上人

當社

明惠上人村中金剛寺小住道一 時南坊の三笠山より

勸清

乃御神より或ハ傳ハ明惠上人神託をなす 勸清乃時

神職

後系宿禰秀鏡是城守護しより一首の歌を詠り

神主ハ秀鏡の裔といふ

らやうはなもはよの神垣や三笠山をの月を

春日山城墟

春日山の頂松林乃中に方同 太平記南方蜂起の條云

根来らハ招き味方は為すも志す比興力同心の兵相集

て二百人紀伊國春日山の城に楠籠り二引雨の旗一流打きて

兵をりり勢を思地桂川三千餘騎の勢して押しせ城の四方を

兵をて一人も餘るに討てけり

八郎が峯

春日山の前舟才天山に上より岩田八郎 付死の地より山上に碑あり流石あり

人馬谷

八郎が峯に東より 押川勢を埋むといふ

岩田八郎墓



八郎諱政信其先出阿保親王姓大江至父政廣分族岩田與北朝守春日山城與恩地牲川之勢力戰而死于時延文五庚子七月文政吉

建初山愛深院金剛寺

同村より奉尊也深明王貞應年中明惠上人の草創にして天正無幾の頃栗林八幡の跡前再建せり

依藤太秀郷碑

境内より秀郷の地を鎮守し其の功績を記す此碑を建てし其の詳は別記に依り

東鑑

壽永三年甲辰二月廿一日庚辰有尾藤太知宣者此間屬義仲朝臣而内々任御氣色參向關東武衛今日直令問子細給信濃國中野御牧紀伊國田中池田兩莊令知行之旨申之以何由緒令傳領哉之由被尋下自先祖秀郷朝臣之時次第承繼處平治亂逆之刻於左典厩御方牢籠之後得替就愁申之田中莊者去年八月木曾殿賜御下文之由申之召出彼御下文覽之仍知行不可有相違之旨被仰云

藤原奉成故居

池田庄中城取る其跡詳し

粉川靈驗記云

藤原奉成は天和園依保任人なり其墓の解脱上人の勅云十日十五の親音此宝号成まは生年十一歳より尚園池田

庄より移住を當寺と地成まは移住信作乃思ひあふ彼宝号三年を經くといふも程なきことか安貞二年五月上旬を病身小通す申す生人同日廿一日より腹中脹満して若病難堪只是親音此名号と咽の原より移居六月六日乃世の阿り爰想ひ病床の枕小音云此葉を腹をへ一葉子を指すより爰年ぬ歸去所肯を和ふは厚葉海乃衣の而ぬ濕るぬるは成る程へる老僧好り水をとてきぬ心中に思惟とく粉河の親音此授給るなり醫をてんれば紙より露なる物あり十粒乃葉ありちさ小豆のごとく又麻の子小似り水に磨和して服する小重病立疾多身符平復ぬ男女老幼も感位は但一粒を遺さるるを悔也爰明朝石念一粒を求濟り永誓中納て誓も身を放りぬ播磨此書寫山の住僧貞舜と云りの去天福二年

福琳寺

寺題紀陽福琳寺  
 寺安 後一條  
 帝聖影相傳其  
 所創建也  
 曾駐蹕興寧樹林  
 白雲芳州跡沈々  
 流風千載未消尽  
 猶有聖真留到今  
 荒川景元



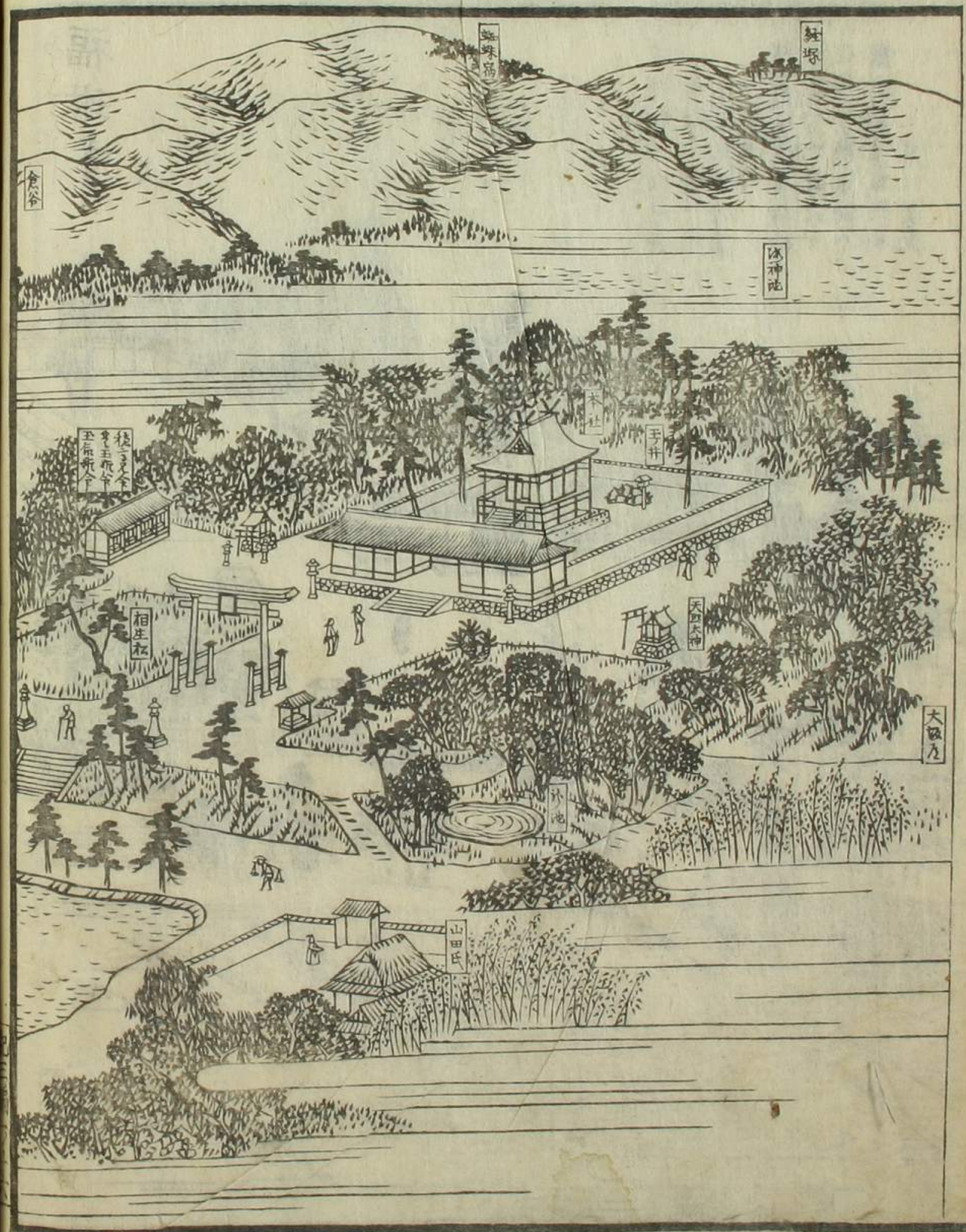
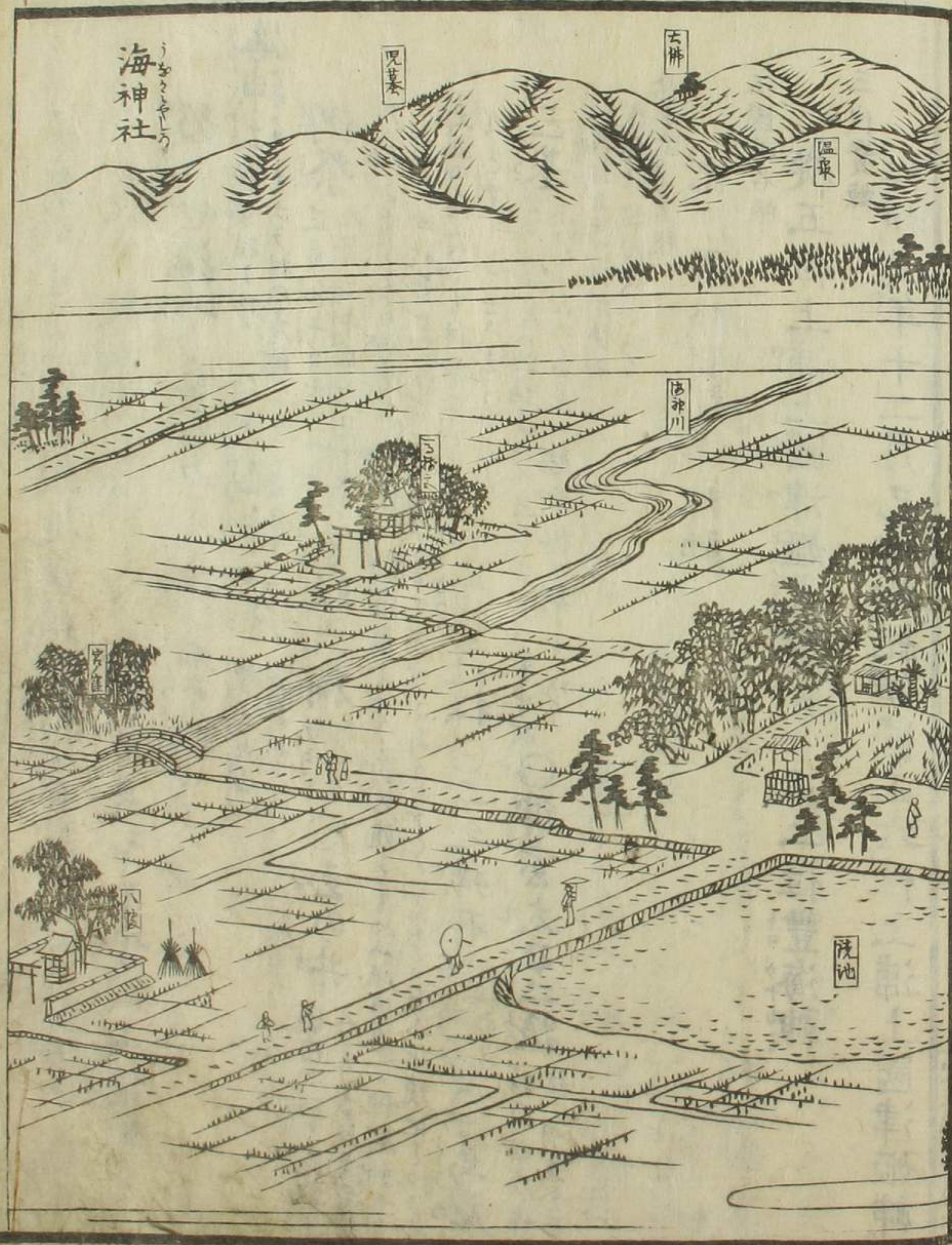
図

金園山福琳寺

豊田村 本尊釋迦如來の作

二月十二日小當寺に來び此寺を傳きて隨處より法華成  
 が所より向ふ所見と傳ふ言ふ未だの青蓮花乃並に  
 長きこと分計ある葉の中より出せし種子のつらに傳り  
 枝月を結くは花漸開く遠近の輩も又一と下目を發し  
 末代の不思議なりと傳中より風分して或西南院より  
 手取し新造し不返給奉成が田地の沖下文を為りて  
 出家して于今現存なり

縁起畧云當寺の靈異記を見えし其慈氏寺に於て其後寛  
 仁二年伽藍再興し初願寺と名し後長元元年下總國  
 平忠道謀反す時平直方中原成道等と遣して是を征  
 し後官軍利ありて同は年源頼信と初して再討しむ



其日當寺に於て敵後調伏を祈りて世は遂に速に滅亡  
し其に敵感文に淺く其に寺号をも金岡山福琳と  
改めせ給ふとむ今寺領若干あり

海神社 神領村より地田名 紀神二座 豊玉彦命 豊玉姫命 國津姫命

例祭 正月 秘年日 七月 十五日 末社 六祠 境内小 玉の井 境内より古秋よりありる此月の桂乃彩とてみみゆ

御鏡池 社前より其の池も此池水に神威映し天正の兵火も神跡は池中小

馬繫れ松 二之拜所 鳥居 一の高居に社地より二の高居に南中村

三基 小祠より三の高居に熊野櫛が繁りあり 神宝 太刀二振 杉河園次作 延喜式神名帳

八月吉日作紀州池田 庄海林若園次より

紀伊國那賀郡海神社

本國神名帳 從五位上浦上國津姫大神 正二位豊海神

三代實錄 仁和元年十二月己卯授紀伊國正六位上浦上國津姫神

從五位下

社傳より豊海神と申すは豊玉彦命此又の御名にして

上の世より熊野櫛が繁りありとて此の御代より此社地より

遷坐し給ふ浦上國津姫神は和泉國の海中より現は給ひ大木

と被て神を畑小督坐して遂に世に鎮坐し給ふ二神社殿を並べ

給ふ海を故ありて上より官社より神田とも多く

寄り給ひつる小世の乱に續た社地を荒らして一城慶安二年

小立て境内殺生禁札を給りて更又大社のかきり備りてあり

神領村海神乃海社の二侯より受え給ふを

神領よりありて代を二ににを海志し此松を本とす 本居大平

里れ名も神のまありてありとて民も亦も敬ふ業を

海神池 海神社の後より 田園敷町に在り

三熊山陽院権現寺 新神より 真言古義

奉尊不動明王 長三尺 大師の作



○熊野三所権現社 境内より例祭正月十五日 ○楊柳觀音 水月觀音

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

○大磯虎石碓 虎の塚あり碑面より玉浦禪定尼の遺徳あり

莊嚴國土利無邊

薦坂峠 金剛童子觀あり郡中より和泉大木村を經て見嶽に出る徑邊して峠に大松あり

櫻池 志野村氏神社乃右より志野谷の水を引て櫻池を造りて長五十間近郷乃大池あり

産土神社 同村より支村あり本社 東屋御前 合殿 ○古碑二基 五石の内左右にあり

當社東屋御前 上古より世所鎮浦もせどもかりそめある社殿わらへに元和年中櫻池を作ると後を造るに櫻池

再建ありなり尋て殺生禁札を造りたりといふ史を按る

小神功皇后乃漸卷より小竹天野二社の祀合葬此事あり小

竹祝々當社に位せれる祀るべし

竹祝々當社に位せれる祀るべし

竹祝々當社に位せれる祀るべし

竹祝々當社に位せれる祀るべし

竹祝々當社に位せれる祀るべし

竹祝々當社に位せれる祀るべし

竹祝々當社に位せれる祀るべし

竹祝々當社に位せれる祀るべし



住吉社  
池

光の草子  
石原公

せきう

昔代

さう

おろり

物き

山原の

公

小竹行宮舊跡

志原神志野南志野村の神小竹行宮一と云ふ人其跡詳か  
 べ或は春去の神地ハ其跡して東原河前ハ則神功皇后を祀るも  
 つい一説ハ春去の神ハ其跡より小竹行宮乃神位

神功皇后三韓を征伐し帰宮後上時麿坂思熊やりの二王

志謀ありと聞し而て南方紀伊國に詣り日高みまを子

應神

天皇 又會後ひく議を新居小及河一思熊王を攻んとく

小竹宮丹遷り申ぬ此時上瀧りて皇時紀一兼乃如くに

して多く此日を経り皆人うまひて常葉ゆくといひ阿

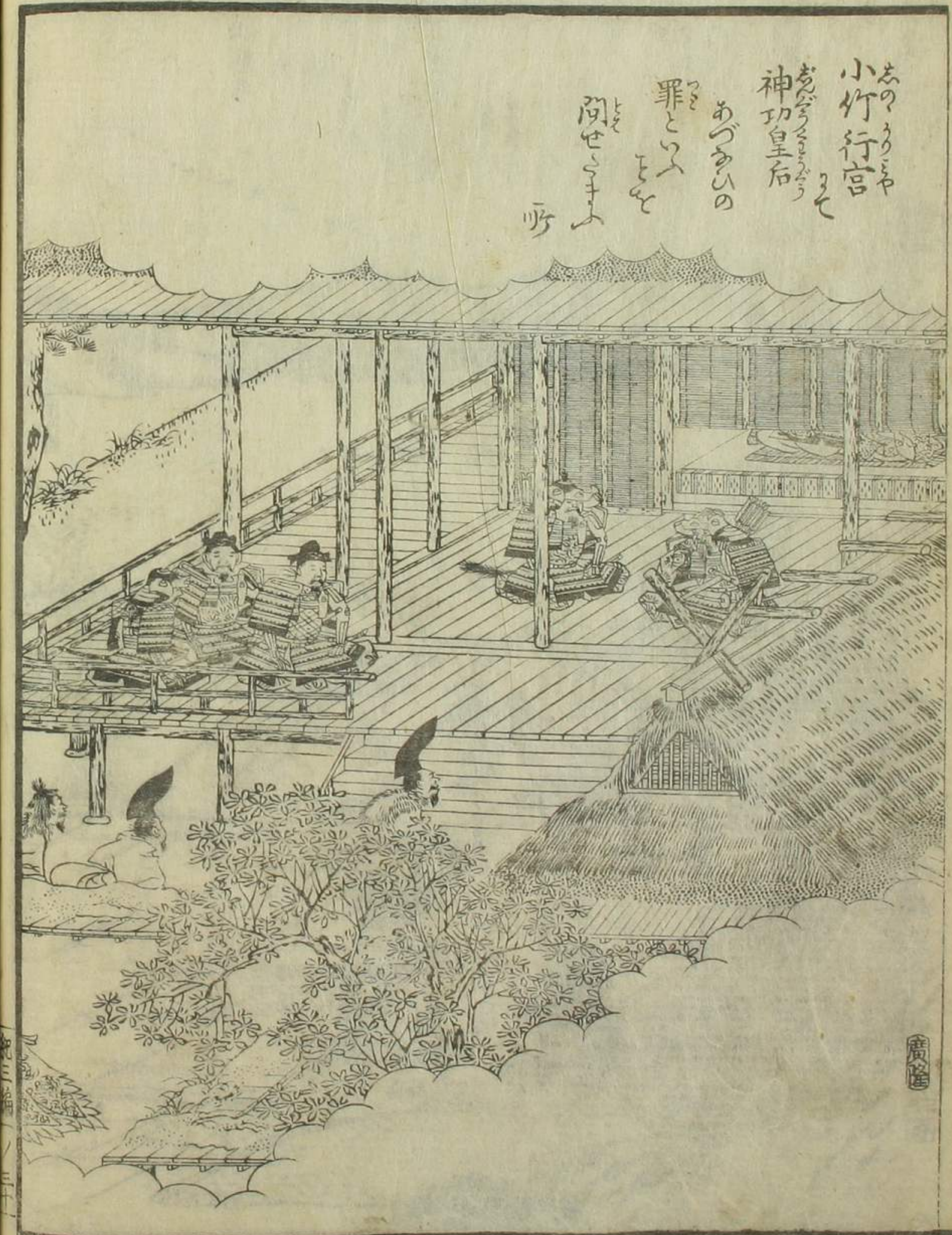
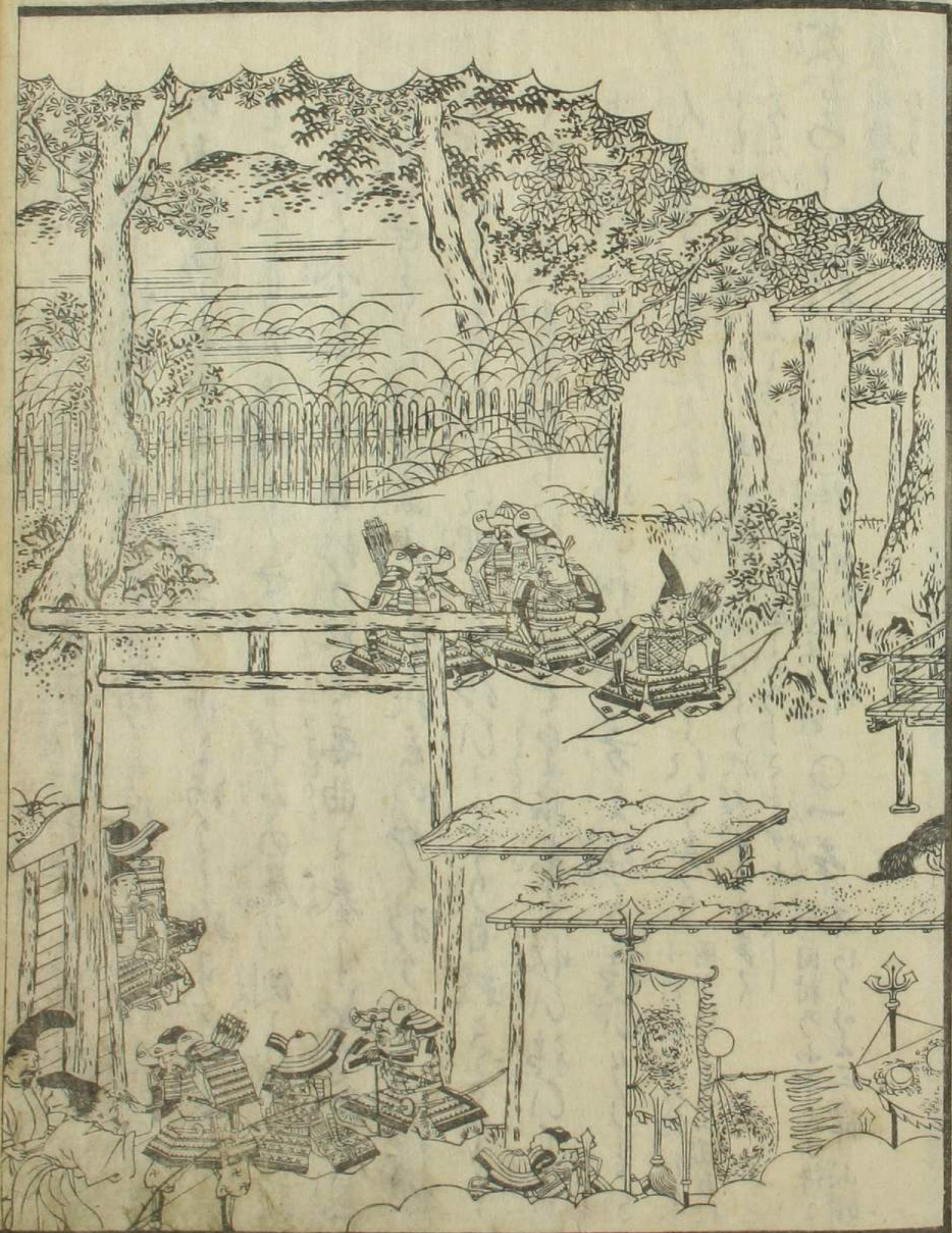
まば皇后も河心中とく紀直祖豊耳命といふ人を先

して此懐何なるゆとて同を後上時一人の孫あり多是ハ

阿豆那比の衆とて二社の祝を合葬一祀ありて城奏し

り是ふ固く里人等をほく人多くありやと問く

世後いりる人あをみ出く中中此地の神は住吉  
 小竹祝と先より東南此方計二里伊都郡の天野社と住吉





して同一尊包城とけり別聖如意輪觀音の尊像あり沙門  
 其像を乞ふ尊を金と稱し  
 像城といふ南都を以て去れ沙門草庵ありとせ歸  
 其像を安置し朝懺悔ありなりその後奇瑞日に  
 新に香花の容彩をあせり星霜うつつて天正年中は五  
 丁堂舎焦去とわたりて其像の淺小火災城免きしを  
 元和年中薩州の沙門道譽も廢絶を嘆きて小堂城受  
 其側小僧房を築れり供養此雲と起り寛文年間國  
 君其地を巡遊し輿を寺門小寄給ひ民居の間へ接し  
 不可なりと命じ給ひて今此靈地に移らせ水田若干  
 を寄せて厄難消除乃祈願所として新再興の志を勵  
 給ひしより一伽藍の場とありしを後厄除觀音と稱  
 して毎年二月上旬日よ八丁方の道俗隨在瞻礼し多形

糸をたすり懐くく〜〜〜  
 信福麻の如く  
男女厄年の事申古乃  
書小多く又元和年中親  
で作りて云々今年七十三とあるなり信二十をひて相人ありは  
いひありしは固寺ハ厄をてんと給へとありきまきと和しよりけ  
しみの年毎よりは信福の初年日すかきつるまきしれきとありて世に  
信まき

○古墳 大門の側より何人  
の横なりやあり

藤の井戸 同村の南岸あり弘法大師湯をとりて  
か持しありしは冷泉涌出せりとて

猿引 上田村のわ猿屋垣とて二所より位人救二十形傳  
あり猿引由来の記救まかり申長けを載せ

猿引の猿衣裳もあつて総てつる牛の虫平 拾栗山人

風森大明神社 島村より長田庄六ヶ村の  
氏神なり例祭九月申午日 紀神三座 中央掛長太郎右  
右王子右母生明神

○末社 稻荷社 ○神宮寺 本社の側  
稲荷社

家集

いそもそののほろろいあざれといふ小あらむ吹風集 大納言公任

夫木抄

うみ下も風の敷るを掃れとてつるあまの嘆も 鷹司院按察司



公  
図



長田観音 ながのくわんおん

いのろめい

いのみち長田の

観音

正徳三年の

ちのい

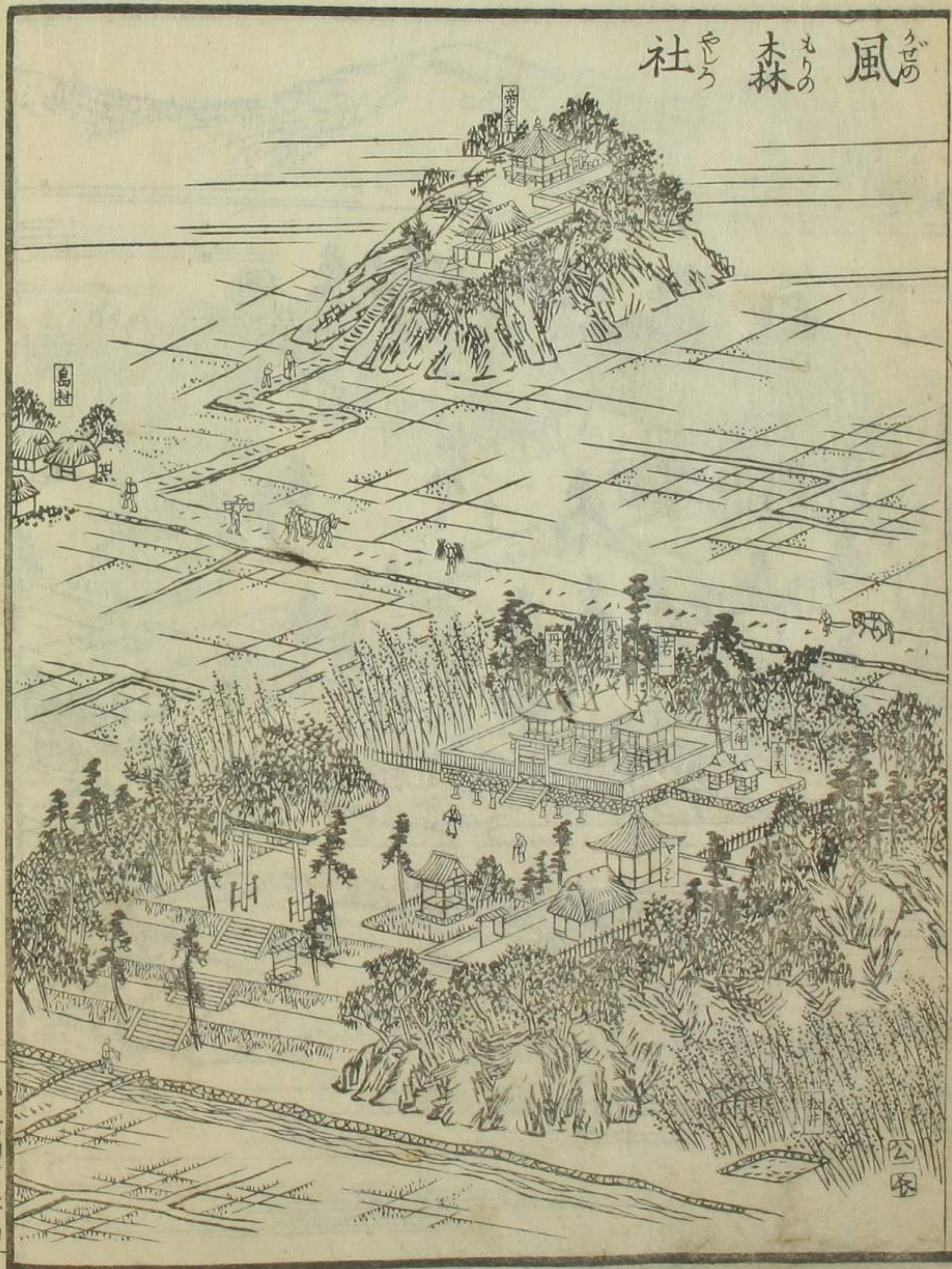
あのみ

十六

梅友

絶三編三十三

風森社



風市森 一名あり

とやこれの川浪もまじりて松のたけの風市森

とやこれの川浪もまじりて松のたけの風市森 馳市依大まき奇とて二園傳記に載り

粉河八景の詞書よ云

粉河寺の西南十八丁計より宮符小西限風杜といふ是なり  
 當郡の名所として伊勢風宮を遷し科長戸部命と丹生明神の  
 二神を祀りてとて傳へり粉河の地主神ありといふ堀内緑竹生  
 老翁り松老梅葉より南小馬場より紀川より横は流は左右に水  
 回濠回町を形しよは路あり又社の前は清めある是を松井や  
 いよむ童男行者粉河寺に九井を穿てせ給ふと云なり  
 井のかさこゝに童男の腰懸石といふありて東は松井村に隣る  
 そのうも風市村といふ是なり河川の長者粉河寺に〇といふ  
 所あり又大納言公任は粉河にまゝて次ふこのをいふは誠せ給ふ  
 和歌あり

風市桜花

左中將氏敦

勝地得名春色奇林中錦繡百千枝花開花落憑誰力

日東風風伯祠

中元神もん錢さそをまぬらるのたふよれ上敷此處 武衛鳥久

恩賀故居 松井村の如畑乃中より

松河孫起 第一恩賀の事

恩賀の事初別當法後嫡子なり清和天皇此貞觀年中に御不豫の事小よりて恩賀がをりしとて當寺にて七箇日の間日別二萬卷の觀音經を講讀御卷教を上奏せし小御惱忽小平念を勅賞によりて法橋に任ぜし時恩賀孫法之末小苗圃那賀郡の廣田の益雅といふ者年未の遠恨よりて宇治橋北邊小よりて殊害せんと擬以踏次人ありて世由をばく恩賀心中に親言成念しをばく小風多起り雲霧降りしとて是は小橋を渡りて平ぬ天晴く益雅系下此人小守侍小於河の別當よりやい御室戸の寄居をさぬといふ益雅思惟よりて恩賀の親音撫護の者なり害心成改むべし一布位居して子細をかりて父子に契約成りし事

帝釋寺 同村より 本尊帝釋天 宝龜年中の教願寺といふ今ハ大ニ廢きり毎年正月三日天下安全乃祈禱を

奉玉山西院中山寺 始元牛玉堂印して諸方へ出れし今ニ絶む

中山村より

本尊阿彌陀如來

脇立 觀音 大日

當寺ハ於河寺此本朝大伴孔子右の末裔方氣乃建する氏寺よりて古ハ諸堂盛大なりしとて當時ノ丸瓦一枚今に跡まら其巴れとてころよ凸文あり

大伴船主故居 同村の東より於河

船主ハ孔子右の子よりて於河寺の縁起よりて故居此南寺丁許より古墳より近來石擲を致す田畑より是船主の墳ありむとより

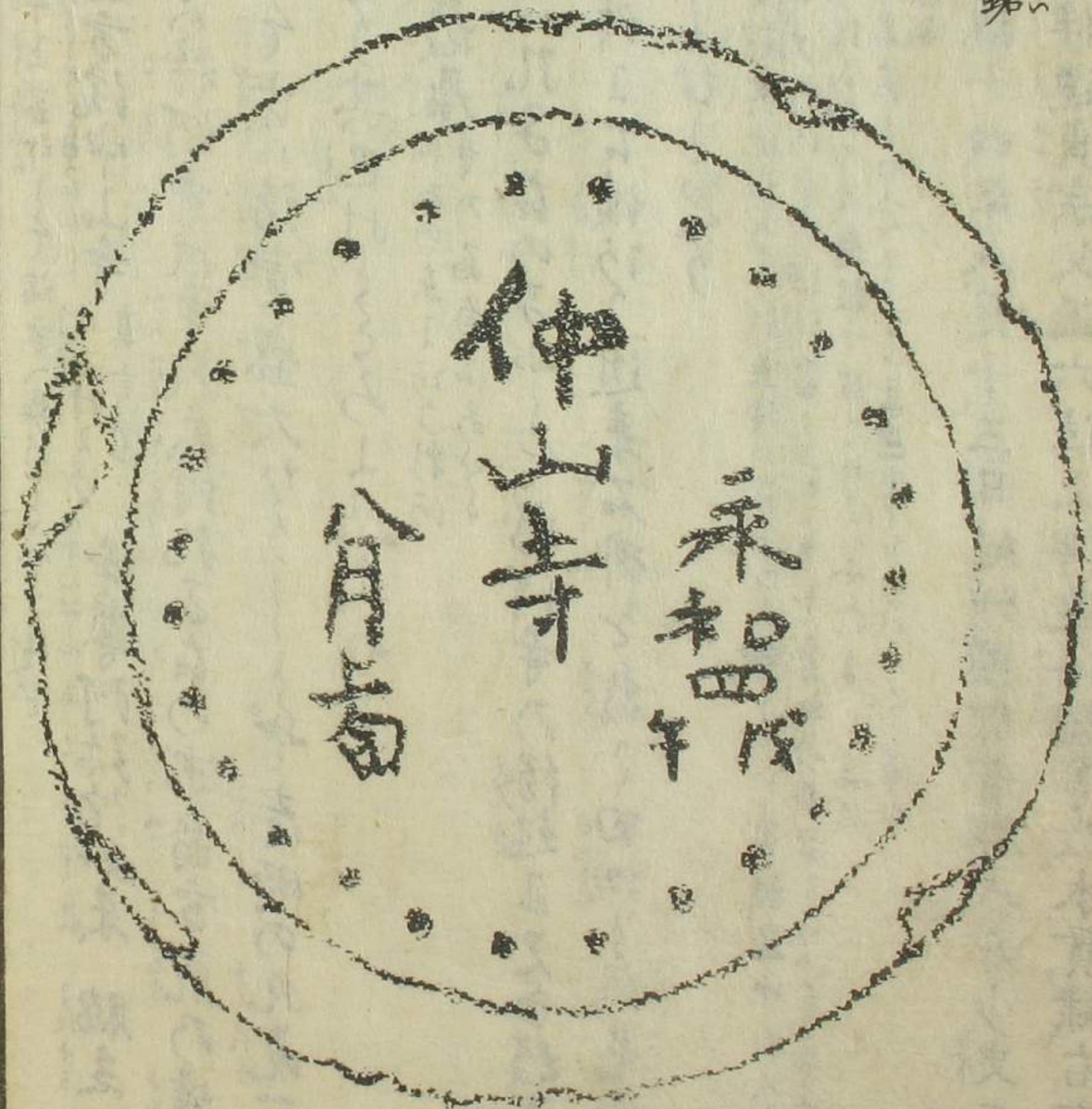
伴益繼故居

其地詳るは益修ハ孔子右の裔よりて貞觀年中其人より物て當り孔子右の後裔數十家よりわかれ今多し存し本國の名家といつて一々系圖をもあれと今四書と三代實錄云

貞觀十四年八月十三日紀伊國那賀郡人左少史正六位上伴連貞宗父正六位上伴連益繼等改本貫隸右京



古尾銘



記三編二二六

八幡宮氣鎮神社 猪垣村よりニテ  
村乃氏神なり  
廢誓度寺 同村より

ひり粉河寺小十学生とて佛經の深義を研究して其僧  
十人ありしが寺中ノ學問所を建て誓度院と号すと  
そん會集を其後粉河寺大門建立供養の時由良の法  
院國師を導師として當所を請けける小教門與隆此功多  
りりく張附の乃小十学生より當院を國師に附  
與せしより遂に禪家乃寺と号し其弟子玉上人永  
亨二年成八月を院を猪垣村に移して諸堂大に成り  
然る小足利義教公帰依淡々大慈山誓度寺と山寺  
号を賜ひ寺領も若干ありりとも星相稱りて終に  
廢類とり然も建長年中より明應の以この論旨院宣  
願文寄進狀下知狀女院方より乃御下文等此類凡て五十

通符又什物もつりまゝありて今由良兵衛寺小藏む

至一人ハ道恒産河系村の人田三郎を夫といふ者の縁なり  
宿支の女帯ヲ於河寺の観音を信しりたり或時男子を産む  
婦を以て子成産むる不義なりとてその子を於河寺大菩薩の  
下棄つたに及ばず其子を拾ひて養育は法隆寺大門供養の時  
は鬼と不意して芥子とるに産養して覺一といひ後至一と改む  
基氏卿乃降依僧の碩徳の願を以て於河寺を夫とす一永正年中  
倉山寺の葬儀に於て大團圓師の法を以て山上より移上人の事  
跡ハ法隆寺大團圓師縁起年々平記井邊撰等に記さるる新編  
鑑書に記す

藤井 後井村より於河 ○花の井 同村より

中津河 深川山崎の谷より出づる後井村を流れて於河村より大門前

前鬼末裔 中津川村より後井村を流れて於河村より大門前

産土神社 同村より 二社 左若一玉子 熊野持現相殿 末社 相殿

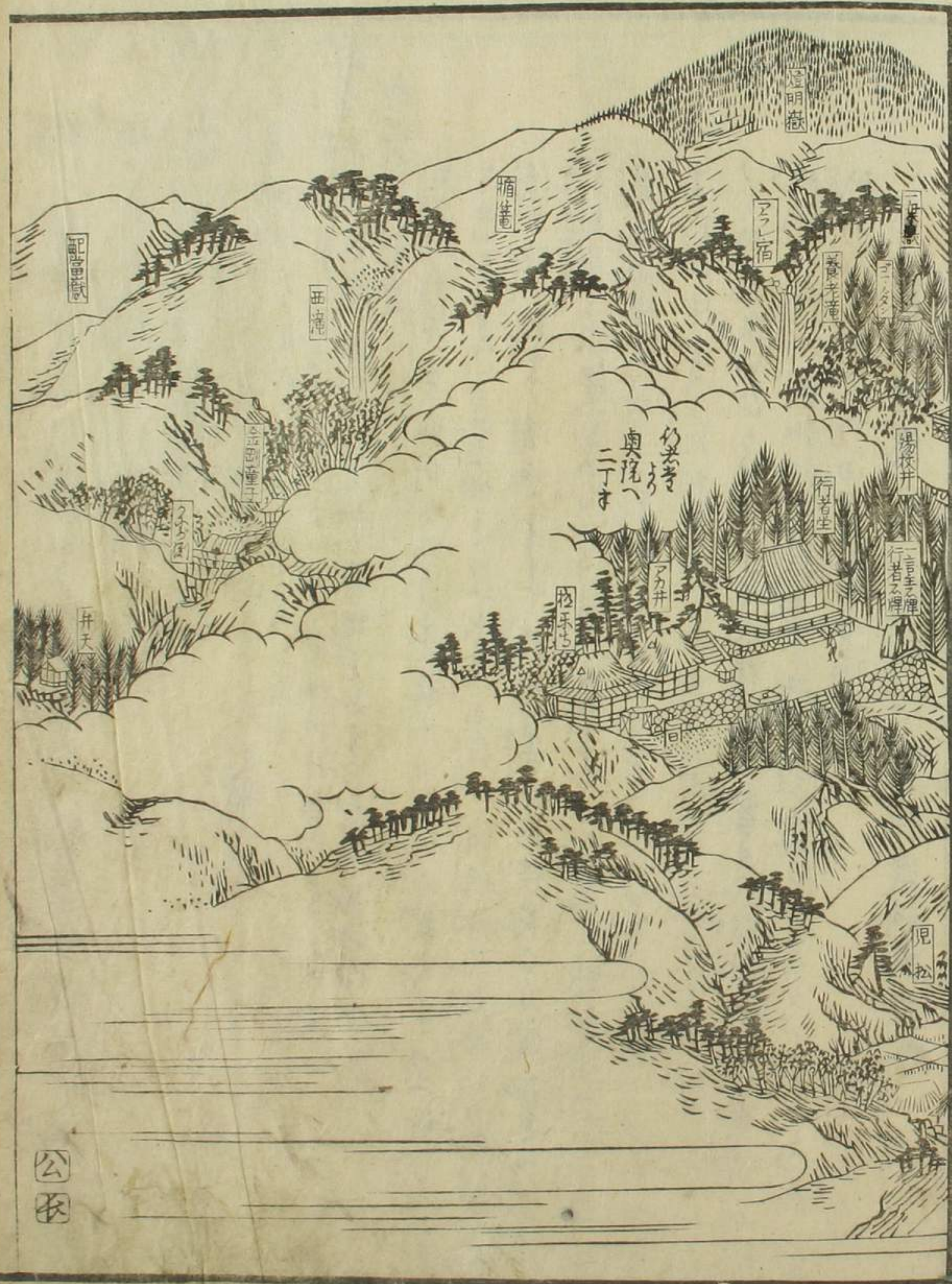
當社ハ役行者の勅請といひ傳く社殿破壊の時ハ聖護院定

より造営し終り且毎年聖護院三寶院の先達神前より  
祈禱の大役摩修り社前乃石蛇籠正平廿四年と刻  
む祠此前後行所齋跡と唱ふるもの甚多し

阿彌陀堂 同村より 役行者 前鬼後鬼像 中

一安ん並み行者の自作といふ世に於る像と異なり其像作りありて粗工あり  
ども皆氣がけり乃者乃像ハ秘するに長く人中も長く秘するに壯  
年の安んと云也左子ハ根法を執ち右子ハ湯村を執る乃者ハ多  
於履成と云くも像われどもは像ハあり前鬼後鬼乃像ハ秘するに力あり  
き作り

此堂ハ役行者の開基として山階諸先達護摩修りの処なり  
堂内ニ文安年中以下後摩修りの札を納む棟本より永徳  
元年酉歳三月修理上棟執筆権少僧都寛祐村人等 若くは  
重慶安部重正深 書一 經口より赤右年中此銘あり屋上  
祿宗久後系有末 之鬼瓦ハ隅ニ二枚づつかきその形各異ありて或ハ怒或ハ  
儀乃堂の物なりと云ふされど結構大なるて落瓦の積り向



公長



中津の河

紀三編一廿八

約ヨリ  
中津川  
十八丁

側は極樂寺といふ天台宗此寺の村落は遠く清閑の  
地を此を律僧住持といふ

祥本宿 同村乃山嶺頭松樹茂る中  
金剛寺子の石虎あり

大人足跡 祥本宿乃山嶺頭松樹茂る中  
の凹の形足跡あり

五本松 大人足跡の如く又六丁にあり中津川村を去る五丁  
五本松の樹の如く又六丁にあり中津川村を去る五丁

かつたを本和州より冬長くして紙の製法といふ所  
は是をまきく葛城といふまきく小角修練の  
海ははるる磯平として時々の葛城の横た  
限横嶺といふ是ありるまきく小角修練の  
まきく白雲の村ありるまきく小角修練の  
すれ山中まきく村里ありるまきく小角修練の  
くのまきく小角修練のまきく小角修練の  
略紀乃浦く大和河内ありるまきく小角修練の  
紙ありて旅人乃ゆきりるまきく小角修練の

葛城晴嵐

拾遺補闕致畏

紀三編一冊九

雲霧葛城山壑閑嵐光春日最佳  
都映金園寶樹来

前八彦為信

粉河町 伊都郡那賀町の中央に去地  
香花の客居を有る南町は回意  
て高賈市殿報を有る南町は回意  
て高賈市殿報を有る南町は回意

鳥居坂 粉河町の入口に昔大鳥居あり

産物粉河酢 粉河山は名産園壺場を用  
酢は名産園壺場を用

粉河蒟蒻 町内製する蒟蒻は味佳  
製する蒟蒻は味佳

粉河團扇 町内製する團扇は名産  
町内製する團扇は名産

夏よりうらみきてとくはなわりの浦風をいさむせし 中院通茂公  
けり近代お奇集り載りて細出み益通和奇お浦のありをりては  
くまの園扇をまんとし草紙時記に一とあり又河野権中納言重信  
乃ちも同集りてあるなり

和歌の浦は芳色乃風のすくさくあわらふをいさむせし 武者小路實隆  
乃ちも同集りてあるなり

紀の海はすくさく芳色より浪うらみしをいさむせし 眞淵  
加茂家集

○鑄物師 範頭左衛門清と一先祖は吹井福芳弘法大師淨光の佛をいさむ  
源時勝南都東大寺大佛像を清くして代孫後勝  
弘法大師の聖山草創の比より此地に福徳ありとぞ

○鍛冶園次 本園法社の神宝は園次の流し  
本朝鍛冶考

包貞本園大和當園入麻位世に一族を八席物と稱はむかの象園に似  
て鍛冶園次は源時勝の後理ぬの方多くは子九く乃り清く本宗仲真も  
大概似て中心の象は大同小異有実次実綱則実実重実実等の介粉河の  
園次ハ一類の上なり

九月十九日遊粉河 那波活所

落木斜陽到粉河 悠々客思接風煙 詩人自有江山債

不識從今償笑篇

粉河寺 粉河村より補陀洛山施音  
寺と号して天台宗の靈場あり

西園順拜第三札所 淨慈院 父母のめぐりもうらめしきなり

本堂 十五間二十間熾業抄より七間正面の堂あり

本尊等身千手觀音 童男行者の作

御位牌堂 本堂の西より千手觀音を祀る 六角堂 本堂の東より

行者堂 本堂の東方より本 淨供所 本堂の西方よりあり

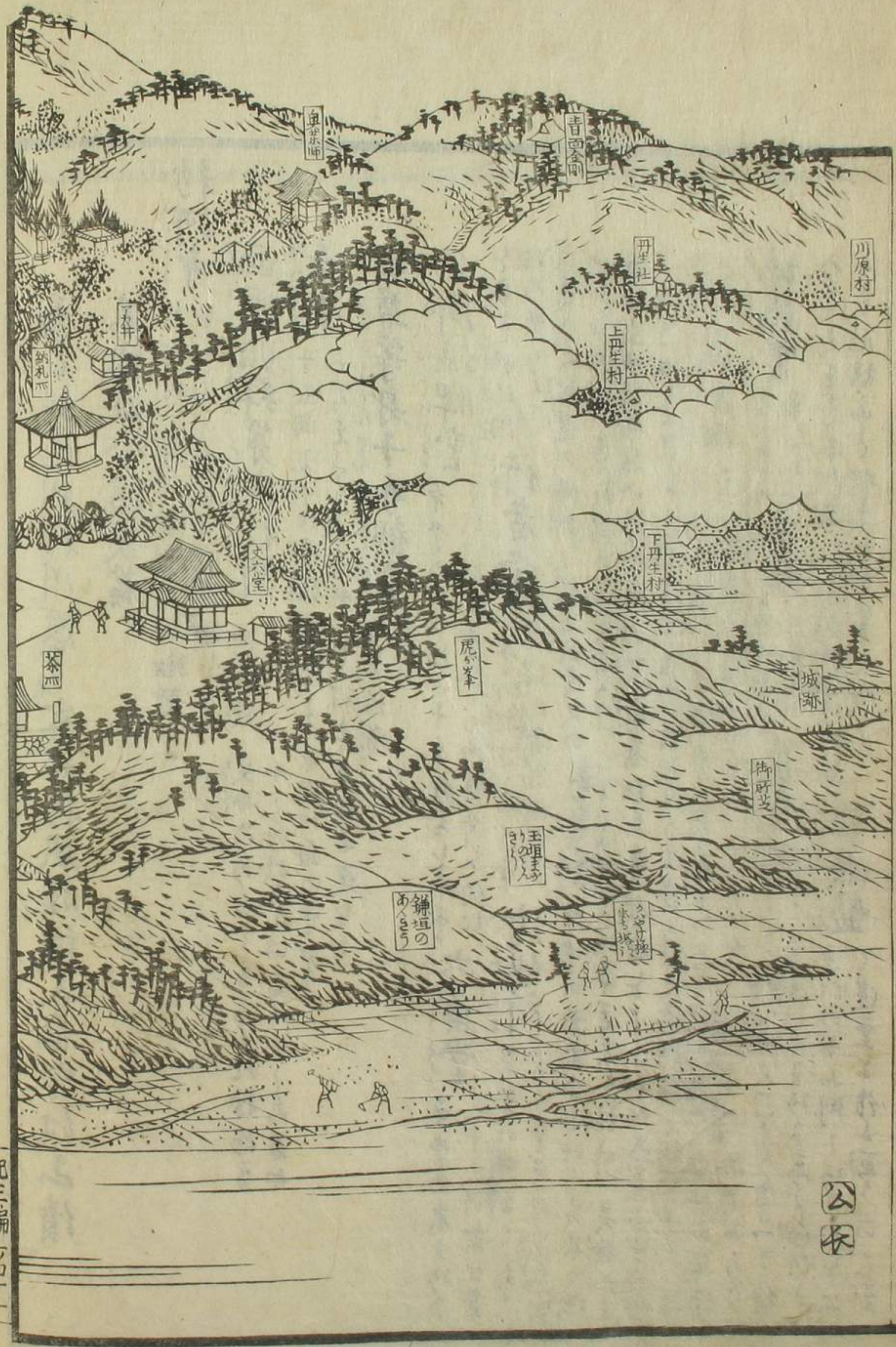
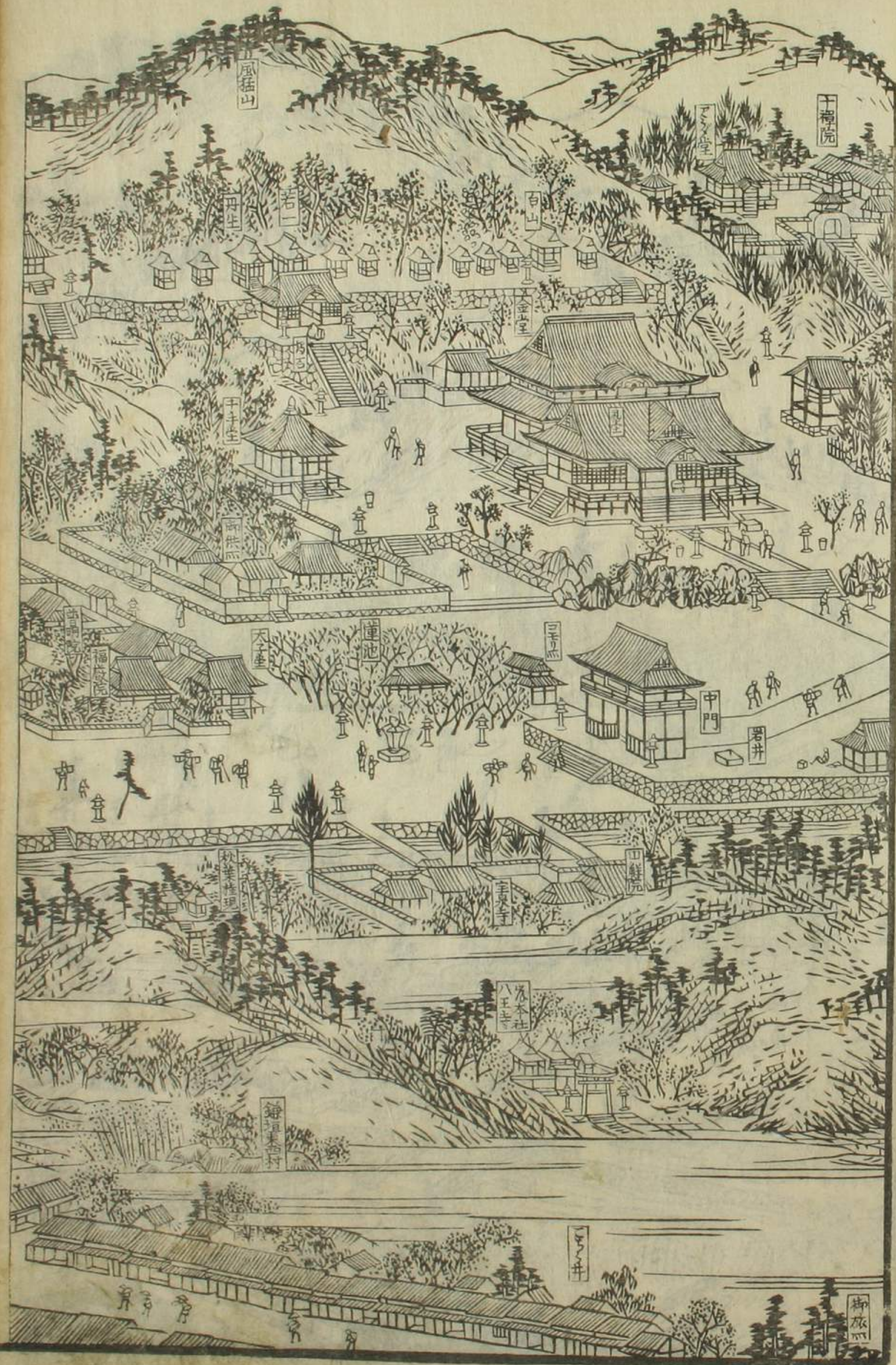
湯液楼 本堂の右方よりあり古本は板

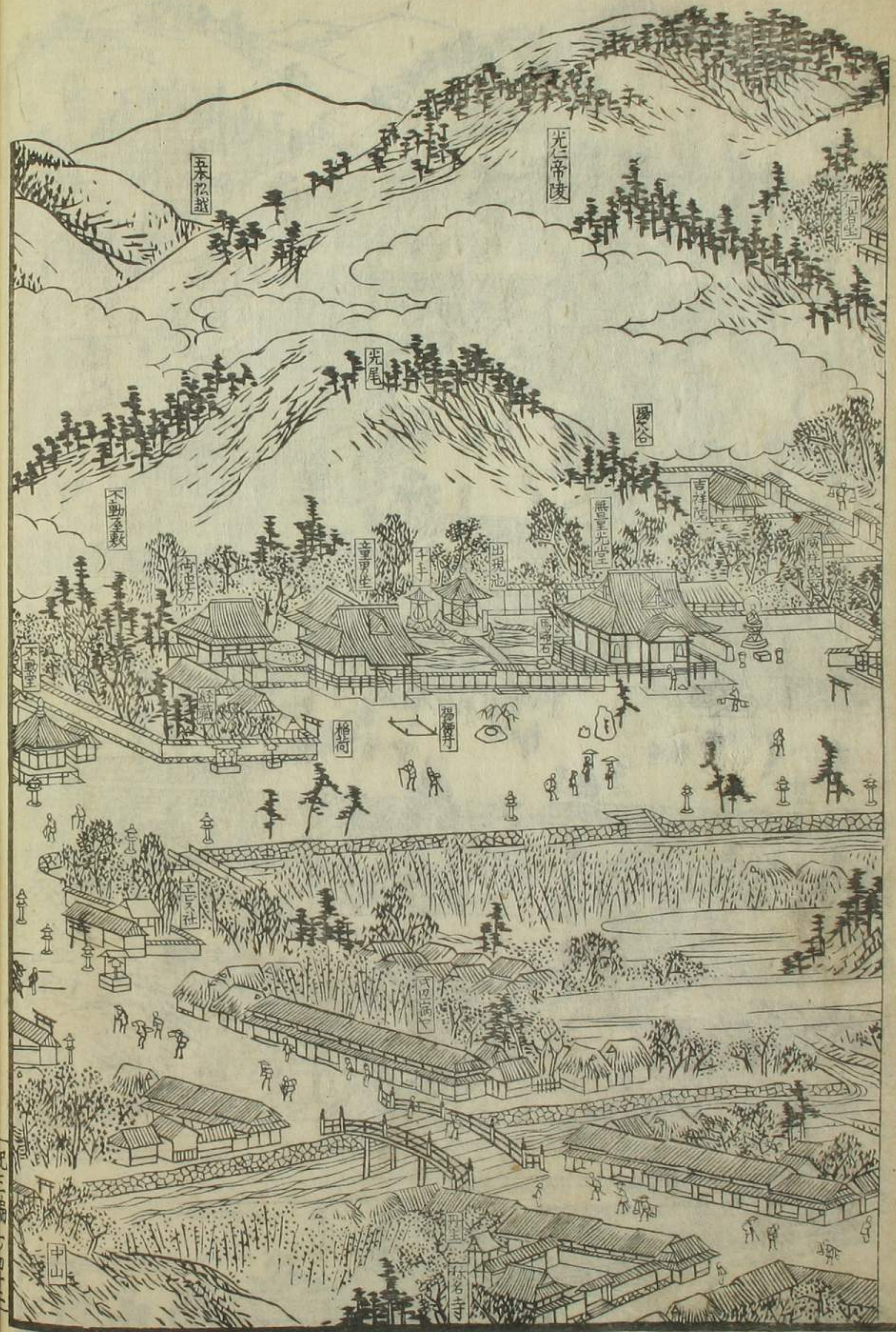
文六堂 本堂の西方あり

地藏堂 本堂の東方あり

中門 本堂の西方あり

鹽瀬盤 中門の下にありあり





中門の外す丁字の八幡存於天春日の三社おまふ年材  
 又天 **小社三祠** 天ハ河内國滋河郡馬馳市佐々妻が女をふらとりの  
**濡佛** 三社の例 **上宮太子殿** 西より **出現池** 池なりは所君池の池なり  
**中鴻堂** 出現池の島中より **三角堂** 中島堂の例より千子就言  
**馬蹄石** 出現池の傍より **常念佛堂** 池の傍の巖より堂中の巖  
 島山満家の碑を袖む後真觀寺殿通瑞澤門尊儀裏書一基團の嫡男島山  
 尾張守満家後五位下管領永享五年九月十九日卒康正二年冬源持國  
 治血而立とり又應永世八年満家院明料寄附状あり永享  
 二年に月廿一日院教將軍永信乃時持國も信長して山池坊に宿り **童男堂** 池  
 坊の東にあり童男行者の坐像を數に於河寺極起し洋あり又童男佛乃  
 縁起も有りむ保元乃比りや河池の位傍と一山の危傍と縁起あり一  
 佛像を據て由良乃湊長郷一安並し其後二百三十二年を以て **揚柳井**  
 文明十八年と爰起りて **地藏堂** 池の傍の **不動堂** 池の傍の **傳大士** 不動  
 童男堂の南より九井の **地藏堂** 西南より **不動堂** 西にあり **傳大士** 不動  
 一なり大石を以て **地藏堂** 西南より **不動堂** 西にあり **傳大士** 不動  
**羅漢堂** 南より **稻荷社** 南より **殺生禁札** 大門の内 **東塔** 西  
 康和三年紀伊守朝 **地藏堂** **十王堂** **毘沙門堂** **護摩堂**  
 補給長乃草創なり **大門** 施音寺といふ額をくけたり一は後世兵火に燒失ひ去り  
 集ふ以額の **念佛堂** 大門前より **蛭子社** 大門前 **下系札** 大門橋  
 沙汰あり

大門前丁字の河なり **わくやの井** 大門前丁字 九井の一あり **茶師堂** 方二丁字  
**當山ハ** 光仁天皇の寶龜元年大伴孔子右といふ人の草  
 創して西園三十三所乃第一番に在り天下に隱居は  
 此靈場なり折此地より葛城の嶺連りて山足南言に正  
 縁して別の一峯を起せば風猛山といふむ一は林樹蒼  
 蒼として人跡稀あり一は禽獸乃類交を得てをむご  
 るそのや一其近郷に大伴連孔子右といふ武ま有り  
 其子を殺すといふ事ある鎮守府の軍曹ふねとて將軍  
 の旗下に屬し貞剛と在り孔子右ハ射獵以業として常に  
 風猛山乃樹林よりけり入る幽谷を照して身成樹上より  
 一巻く猪鹿を殺ひたり或若孔子右が左の眼眇りたり  
 して光明赫奕として大星はほある光あり孔子右奇異



の思ひを御一樹と成りて光明を放て新所にせむを  
修め其地にて其光遠ざかりかぎり来ると又平の如く小  
く更と定まる所ありか光を現むは有りて曰く及  
びて中一其地を徳ゆり孔子古の思ふ中より  
宿同のまばらやか新瑞光ありあつたこの地におろ  
く二精舎を建てる佛像を安置すなりやとてまろ  
柴店を結ぶるなりもしつやうらゝと児童男行者あり  
る孔子古が家小寄宿せん中成をふ主人あきと議り  
行者去候して極成や何小まれ新よと作るは我助け  
すなりせんといふ孔子古は光明を放て地乃州府より佛  
像を造らんと思ふも佛師きてつをさうと新を果さ  
るよとをかほ行者保くわまの佛とありは徳もを成  
遂させまわらんといふ孔子古のやうれくく日此新

を法界流生れらるゝていふ子躬全奥州よりの長途安穩  
み帰郷せん中を新し徳も新く思ひ立くなりて即  
ち吾を信はく先草庵の地へ行り行者孔子古小治  
中より此庵中より七日たうらゝ佛を作らはれん  
とこのるゆめく来て是後よと造り早らばはれ汝が宅  
けり門を叩くもそのとれ汝より後を必新佛をかせん  
けり門を叩くもそのとれ汝より後を必新佛をかせん  
にゆりて七日の精進潔斎して居りしをかりし門  
を叩くもそのとれ汝より後を必新佛をかせん  
を叩くもそのとれ汝より後を必新佛をかせん  
先とあり人けりも思ふに悟しと思はれるの庵は徳  
んはば行者はかきして金色は千手観音の尊像自然  
出現し後より孔子古の款森大とて新く此より弓矢  
を投うら獵幸成庵とて新く佛法を傳せりとるむあり

小河内くわうちの國邊くにし河那馬馳市まぢに依よ伯某はくまといふ長者ちやうじや有りりて世  
に依よ大夫たふといふ其妻つま女病にやまひに依よ留とど療りやう子こをほくせども更さら  
に験たまりて歎なげきつゝ其の行者ぎやうじやを家いへを訪もとひて千手せんじゆ院いん  
羅尼らにを誦とくし慈あはれに加持かぢせし其病にやまひおどろけり疾はやく瘥なほり至いた  
人の喜よろこびかぎりなりて家小貯ちりり所ところの衣い物ぶつとま  
布施ふせせしれども行者ぎやうじや固辭こじす文ぶん比ひ多た 賴らい付ふ帯たい一いつ條じやうと文ぶんて  
歸かへりんと次主人じしゆじんあつて思おもひて其住ぢゆう所じよを同どうに紀伊國きいこく那智郡なぢぐん  
風市村ふうしむら粉河寺こながはらと名なを遂つひにゆぐともおく立た去しやうりぬ依よを  
まよはれこひのりやう家眷けつげんを奉ほうひ較かく多たれ布施ふせ物ぶつと持もて  
風市村ふうしむらに尋もとめりぬされど粉河寺こながはらと号ごうを寺てらにおもひを  
いづつ〜思おもひ多たく人ひとにとくもあはれせん〜なきて  
山中やまなかを徘徊はいかいし流ながき白しろく粉こな穢せ乃の如ごとく或あるはつと  
とあまをその粉河寺こながはらと號ごうして流ながれ流ながれいふ林中やまなかを分わ

るに草堂そうどう一字いつじ有りりて其時そのとき日既ひごとに暮くりて其の戸かどを  
開ひらきて入いる小幡せうばんもあつてい〜時とき佛ぶつ像ざういんえぶれども花はなと  
播ひり几い代だいを〜うちありは〜か人ひと瘡かさを〜ゆ〜奇き異い  
な〜れ花はな中なかに〜佛ぶつ前ぜんの燈とう盡じん自然じぜんに火ひを照てんと堂どう内ない燈とう  
〜〜〜ゆ〜也なり〜依よをま〜ち〜發はつ起おこりて作あるんれ  
を觀くわん音いん大だい士しの尊そん像ざうの多たくせ〜る形かたち有りりて〜先せんに行者ぎやうじや  
小施せうぢ〜賴らい附ふ帶たいも觀くわん音いんの沖おほ子こに繫くわり〜行ぎやう者じやハ觀くわん  
音いんの化身けんしんとして〜ま〜り〜れ〜て感かん歎たつ誓せい禮らいして一家いつか建けん  
出家しゆけ〜觀くわん音いんに在あり〜り又また伊い那な郡ぐん那智田村なぢのりだむらの婦めづ人ひとカ  
自みづから草くさ堂どうの隘がい陋ろうをあらがれ己おのが家いへを掃はらして親おやまれ幸さい  
堂どう〜郡ぐん中ちゆう名な子こ村むらの女によ某まハ己おのが宅たくを掃はらちて礼らい堂どうに施せ入に  
〜りり〜精しやう舎しゃの依よ攝せつ佛ぶつりて形かたち返へん〜〜足あしを據たひ福ふくを  
拓たく〜業ぎやう幾いく子こ弟ていといふ教くわうをま〜び正曆しやうりやく二年に冬ふゆ 華山くわさん法ほふを

之熊野山より御下向の次、當寺不通車一泊し、後白河  
 法皇ハ當寺に藏まはるる三尺の尊像を掘りて、京都世三回  
 堂の例小千手堂に中尊と稱し、後より拵園家も亦信作厚  
 く承承三年、入宇治殿永保元年、入は系極殿康治三年  
 あり、知是院殿元久元年、入は松殿光隆を遣ひ、系伯、後  
 將軍家にて、應永廿八年、足利義持公永享二年、入は足利  
 義教公おど御臺所、とせ、小香華をより、後、都鄙乃士庶  
 の郡系、とつとをい、わたり、堂塔も、を敷、凡て、又百有餘、宇に  
 及び、成天正年中、豊吉閣の大舉、よ、玉々、皆一時の、世、去と  
 形、を、し、ゆるん、慶長以後、天下治平、不属して、廢を起し、絶  
 を、終、と、猶、古、不、復、と、る、り、成、得、り、後、又、屬、自、火、の、災、り、り、と  
 つ、ども、再、建、乃、功、速、り、と、稱、與、此、災、たり、か、入、實、と、盛、る  
 る、靈、場、と、い、ふ、べし

大政官符 紀伊國司

應免除粉河寺所領鎌垣東西村四至内雜役等事

在那賀郡

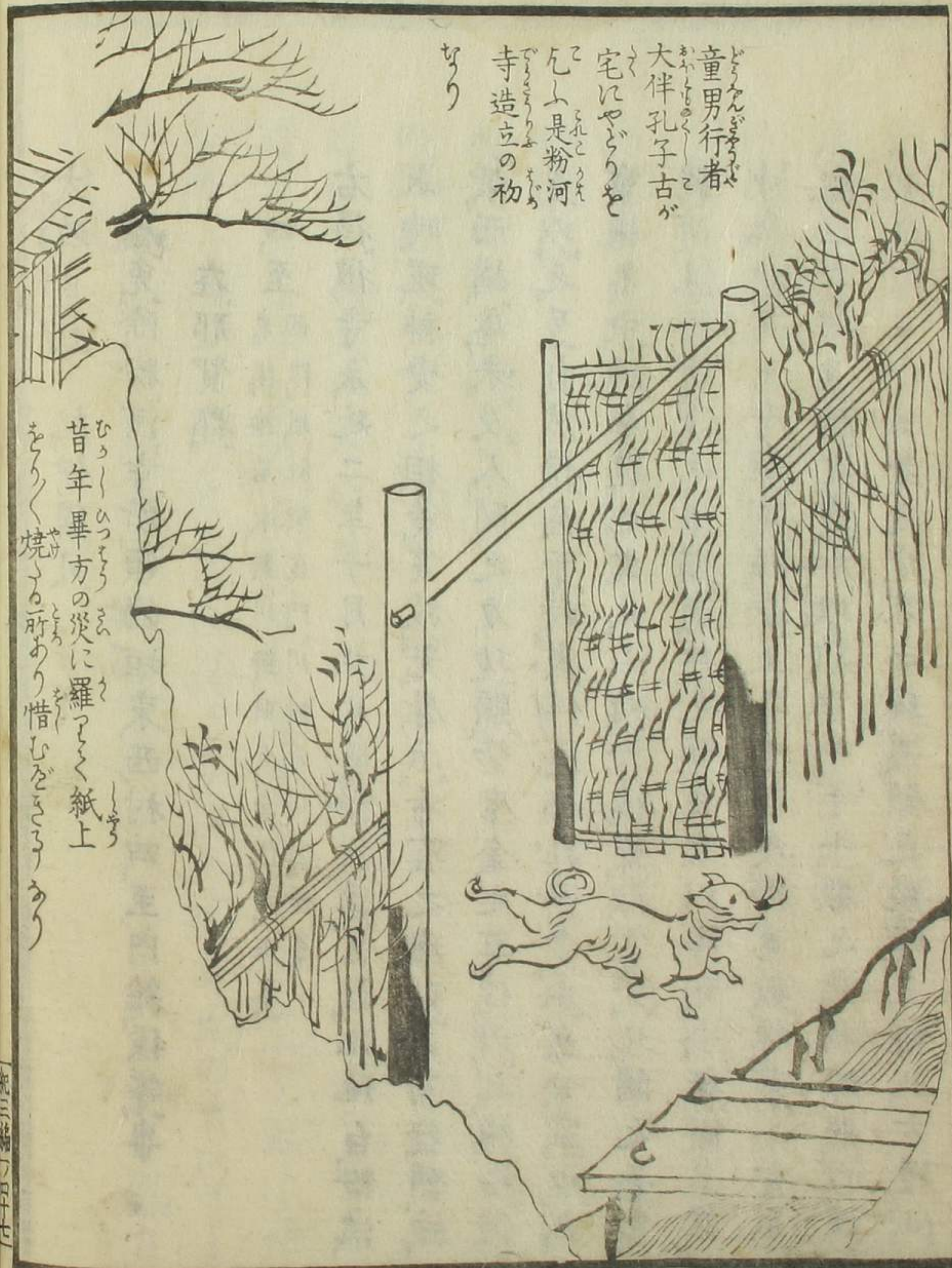
四至 東限、椎尾水無川、辨財天、南限、南山峯、  
 西限、風社柴尾門川、辨天、北限、横峯、

右得彼寺永延二年十月廿日解稱謹案舊記此地白粉流  
 水時現神變之相黃笠放光屢示希有之瑞點處而發願結  
 柴而構庵未及人間之力功顯紫磨金之尊像以之稱粉河  
 寺以之号自然佛矣于時大伴連公孔子古奉為公家以去  
 寶龜年中所奉造也玄武山峙於後靈嶽雲聳北闕之臺青  
 龍河流於前法水浪唱南無之聲自來以降到今無懈怠就  
 中奉祈國王聖朝寶祚獻上年中兩度御卷數殊蒙 宣旨  
 既為御願奉修之庭加以斯寺千手千眼之光明好照心懷  
 之暮暗三十三身之分容亦現滿願之曉晴三維北方繞仙



今其俣を寫せり  
下の二圖も  
おまへ

廣隆撰寫



童男行者  
大伴孔子古  
宅にやうり  
んふ是粉河  
寺造立の初  
なり

昔年畢方の災に羅く紙上  
をりく焼く所あり惜むをさうりなり



くちのくにさび  
河内國佐太夫  
参詣の條



おんもの  
大伴  
孔子古  
子手  
観音  
拜い

廣隆模寫

紙三編ノ四十八

粉河寺に藏する所の繪縁起ハ  
 鳥羽僧正の筆といひ傳へ今以上  
 三圖を抄出と



紀三編一四十九

丁酉春  
 廣隆模寫

洞而為鹿苑一角南面有拜路而住麓人所謂鎌垣北而已  
 時代變改附負臨時雜役責陵三綱住僧弟子職掌人等爰  
 堂塔房舍從風破損參拜貴賤競浪往還修造作補護裝  
 束以件雜人令勤仕代代國司免雜役租稅官物永為舊例  
 而郡司背其旨差課雜役付煩公事愁在斯望請官裁因准  
 傍例給官符在國免除四至之內臨時雜役將停國郡之責  
 休寺家之愁奉祈鎮護國家者正三位行權中納言兼太皇  
 后宮職權大夫右衛門督源朝臣伊涉宣依請者國宣承知  
 依宣行之符到奉行

正曆二年十一月廿八日

坊舍二十二箇

- 御地坊 出流池の西より當寺北頭坊にして宝曆四年高百石を寄附して坊
- 圓解院 中門の外
- 寶泉院 園解院の西より
- 德院 德院の
- 惠門院 威祥院の
- 福嚴院 惠門院の
- 蓮素院 福嚴院の
- 善行院 蓮素院の

- 普明院 太子寺の
  - 威祥院 普明院の
  - 惠門院 威祥院の
  - 福嚴院 惠門院の
  - 蓮素院 福嚴院の
  - 善行院 蓮素院の
  - 松壽院 茶師寺の
  - 德壽院 松壽院の
  - 明光院 德壽院の
  - 延命院 明光院の
  - 律院 中寺の
  - 龍騰院 律院の
  - 良福院 龍騰院の
  - 圓藏院 良福院の
  - 本堂 亞相老公乃御筆なり
  - 上土門 亞相老公乃御筆なり
  - 六社壇 本堂の隣にあり
  - 鎮守二社 龍神 丹生大明神
  - 小社九祠 鎮守社の左右より神祇二百
- 此壇より此社建あびりて神々中も  
 鎮守乃若一王子権現の東野村より遷り丹生大  
 明神の名は若山より勸請し有り所ふしてと  
 又大律弘之此本殿なり

○例祭 毎年六月十八日あり此處にてハ振りぬ糸礼なり

十七日の朝もまた元より彼車樂と云物成多く引入て並  
かしく皆火より一鳴物拍子やうあびていつと諸一太  
門の方より二つとてに申ひくつと先くもあれとの  
りりありやと海月の先ふまて何中ん之を車樂此上  
一居るものごとく皆あつて鳴ものもやれぬあつと  
る貴人の儀も一あやとあ中くむしほくも十は又  
案許やも壹此馬帽子素袍よち刀とれた矢おひあるが  
馬よのてとれたも多く連くつ弓を携もつりあひと  
後豊れ方一初つりつ初る者どくくを馬糸といつた  
あつと後ふよりくくさけはくを隨兵と稱して民戸よ  
り年くまよりくくにあよ出るなり此神日さあきハ丸  
争つて人の弱人子とせよてハ是は寺乃開基大伴孔

子古を撰ぎ取らるる一弓矢を帯せハ獵師なりをか  
子扱定和より初り出るハ昔戎馬一のせ若笠中一の物  
小紙の志でさうりけ山多れ尾廿一節つらとをさかい  
はれれ一あり面も辨も彼志でさうり包こぬれを  
少もええはく幣帛を馬具種くさうりわたり其  
外むさくも多く送りしり是を栗栖乃一川物といふ  
栗栖此里よりハ又里よりつり宿よりまうてさうり坊  
二宿り居るをも七度中の使をやりて後よ出まらあつて  
一かたりと我余按むとむり一保延江年徳丈寺中將  
公結郷より波地を此寺より寄附せられし多お小見え  
り故あつても多し領家より家司あつて祭よわささ  
一が例と初りて今もかつたさうり役さうり又縁起よ  
りええつれ河内國左大臣が女瘡瘡と後此観音を為信



とて園を立出さる姿城の門をゆるしん昔の女の馬か  
どんする時々蓋に落殖を長くあれど……とよをよ  
まへえぬさぬわうりひくも律りさ古れさうり  
海りさめさるる多きせりし御治し御神載る車  
二両又さひり律り右枝形と拍子とりは神を馬に  
のまれ二人律子二人法師の與ふさうり又駕籠りのれ  
るも歩あさもり甲曹城長刀を執るは又人中より  
騎馬もり被随兵も今日ハ禮をさうり母衣おひり奉  
十人あかりさむしやうりいさく縮高の荷おひり者  
入人園麻二奉行をより細めて花の形おどかき物  
おる音多し次は神興さうりら右刀持の中津川の若八  
人わり言さるに彼だん尻さうりものを曳なりと律さ  
まの皆同さうりだれども縁と焼籠りして一間す小一間を

りり此意小車をゆけ縁を引よのり後し押し者  
ま下屋の幕を引取し花おとを枝かひ節之味  
縁おどわりさ拍子どおとる言欄して思案り  
本地形おとあり此さうり人教多く乗さる打籠の  
上下ふら釋紀むらうとありの水川といふものを  
引さる上より縮笠城さうりありたさうりおを竹と細  
くさるる花おどを付さる次身をみさる後おほく

○縁起一卷

宝龜元年の草創の事を記し貞觀年中より壽永年中ま  
での靈驗二十三個條を記し壽永の奇蹟の縁起といふ事にして

古書小徴と云ふ事多し世に縁起なり古書小徴永十九  
年十一月十二日依法水邊衛尉長兼藤原三條坊門密明藤原三條  
勅解由小路入道兼將神紀云と云り元亨教書以呂波字類抄攝論抄  
玉葉集用類聚さうり古書より尚考れ事を記さるの皆古書にさる

延喜主税式

紀伊國正税云 云 祐河寺料四百束

玉葉集

花衣かさるるさうり又さるるさうりは月とあさる

同

此被<sup>レ</sup>ま<sup>ハ</sup>るは法師のま<sup>ハ</sup>りて出家<sup>シ</sup>てのつゞり<sup>ク</sup>に於ての親<sup>シ</sup>ま<sup>ハ</sup>り  
 中<sup>ニ</sup>てはな<sup>ハ</sup>りてやがてあ<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 くみ<sup>テ</sup>る佛<sup>ノ</sup>修<sup>メ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 よ<sup>ク</sup>か<sup>ク</sup>ま<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>け<sup>レ</sup>し<sup>テ</sup>はな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り

此歌ある寺の別當なり。其體不測あり。其子孫ありてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 とも<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 こと<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 り<sup>レ</sup>これ<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 こと<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り

風雅集

補陀落の海流のあ<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り

新拾遺集

ひ<sup>ト</sup>より風<sup>ノ</sup>ま<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 花山院御製

家集

右のつゞりも洋<sup>ニ</sup>に靈<sup>驗</sup>記<sup>ス</sup>て見<sup>ル</sup>こと  
 文明元年四月廿日粉河寺勸進之三十三首依<sup>テ</sup>夢<sup>ノ</sup>告<sup>ス</sup>勸<sup>進</sup>之<sup>レ</sup>云  
 置<sup>ニ</sup>字<sup>上</sup>於<sup>テ</sup>粉<sup>河</sup>寺<sup>歌</sup>三十三首和歌一首とた<sup>レ</sup>内<sup>今</sup>  
 依<sup>テ</sup>三<sup>十</sup>三<sup>首</sup>粉<sup>河</sup>水<sup>の</sup>つ<sup>ゞ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 爲<sup>ス</sup>家

千首

右三十二首の奇冷泉為久卿自書して當寺に納<sup>ス</sup>りて一卷  
 今も<sup>ハ</sup>つゞり又<sup>ハ</sup>同<sup>ノ</sup>三十二首頌<sup>ム</sup>冷泉<sup>ノ</sup>為<sup>テ</sup>村<sup>所</sup>及<sup>シ</sup>て此<sup>ノ</sup>人<sup>乃</sup>融  
 殺<sup>シ</sup>たり

三十三首詠の中

絶<sup>レ</sup>た<sup>ハ</sup>粉<sup>河</sup>川<sup>の</sup>あ<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 耕<sup>ス</sup>雲

つ<sup>ゞ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 爲<sup>ス</sup>村

つ<sup>ゞ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>りてはな<sup>ハ</sup>り  
 同

清少納言枕冊子

寺<sup>ハ</sup>ハ<sup>ト</sup>畧<sup>シ</sup>石<sup>山</sup>粉<sup>河</sup>流<sup>賀</sup>

頼道公高野詣記

妹<sup>山</sup>姨<sup>山</sup>云<sup>ハ</sup>其<sup>西</sup>不<sup>經</sup>幾<sup>程</sup>暫<sup>之</sup>止<sup>御</sup>船<sup>自</sup>岸<sup>邊</sup>迄<sup>寺</sup>

更<sup>籠</sup>驅<sup>令</sup>參<sup>粉</sup>河<sup>寺</sup>給<sup>先</sup>著<sup>御</sup>休<sup>幕</sup>之<sup>本</sup>堂<sup>之</sup>西<sup>門</sup>十<sup>餘</sup>間<sup>一</sup>面<sup>御</sup>

西<sup>二</sup>閒<sup>懸</sup>列<sup>御</sup>簾<sup>其</sup>内<sup>裝</sup>御<sup>座</sup>南<sup>庇</sup>鋪<sup>疊</sup>二<sup>枚</sup>爲<sup>上</sup>達<sup>部</sup>殿<sup>堂</sup>

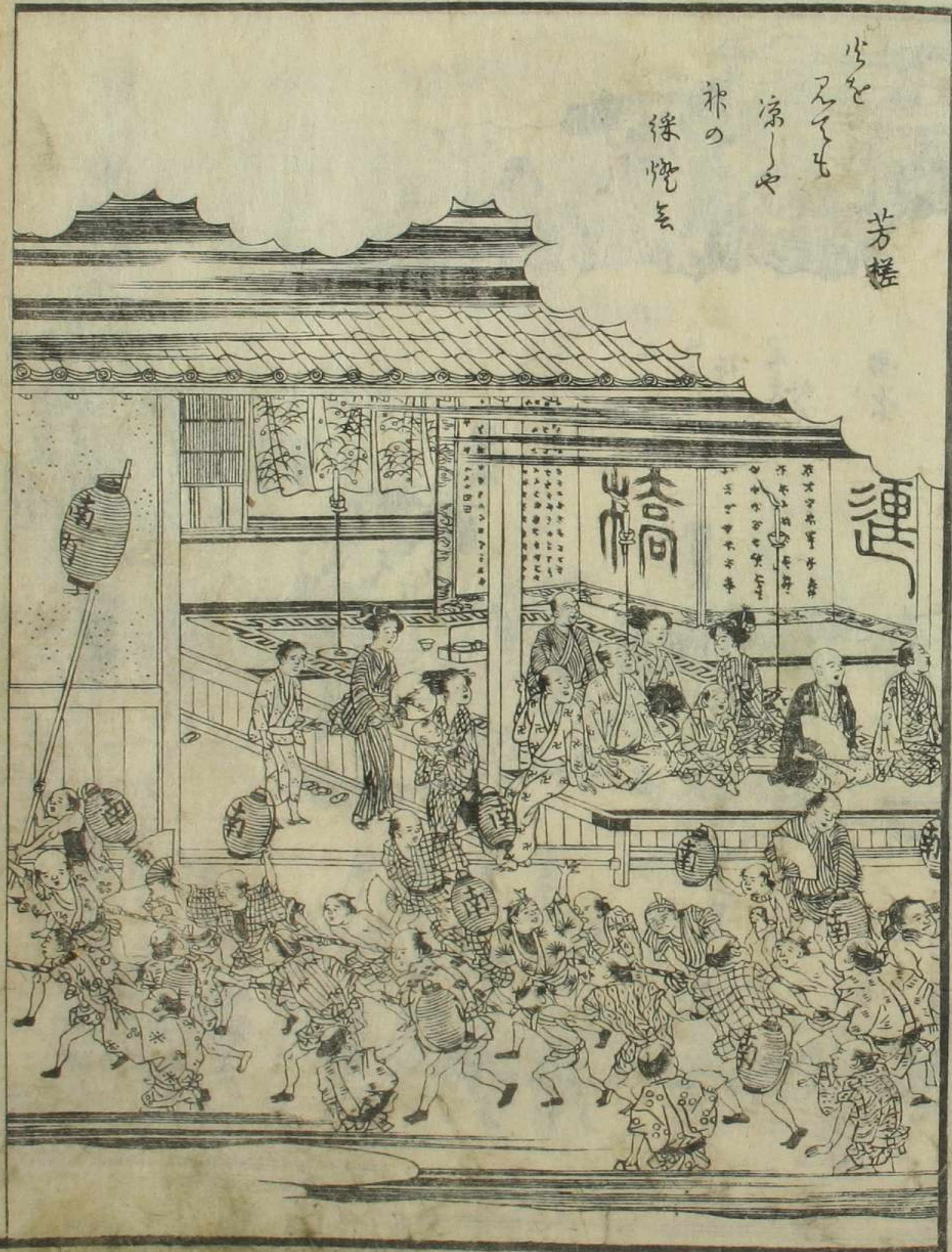
上<sup>座</sup>先<sup>奉</sup>供<sup>御</sup>明<sup>五</sup>千<sup>燈</sup>御<sup>導</sup>師<sup>召</sup>僧<sup>次</sup>令<sup>行</sup>誦<sup>經</sup>

施<sup>僧</sup>供<sup>米</sup>三<sup>十</sup>石<sup>次</sup>所<sup>司</sup>三<sup>綱</sup>賜<sup>祿</sup>一<sup>匹</sup>自<sup>餘</sup>各<sup>匹</sup>綱<sup>子</sup>

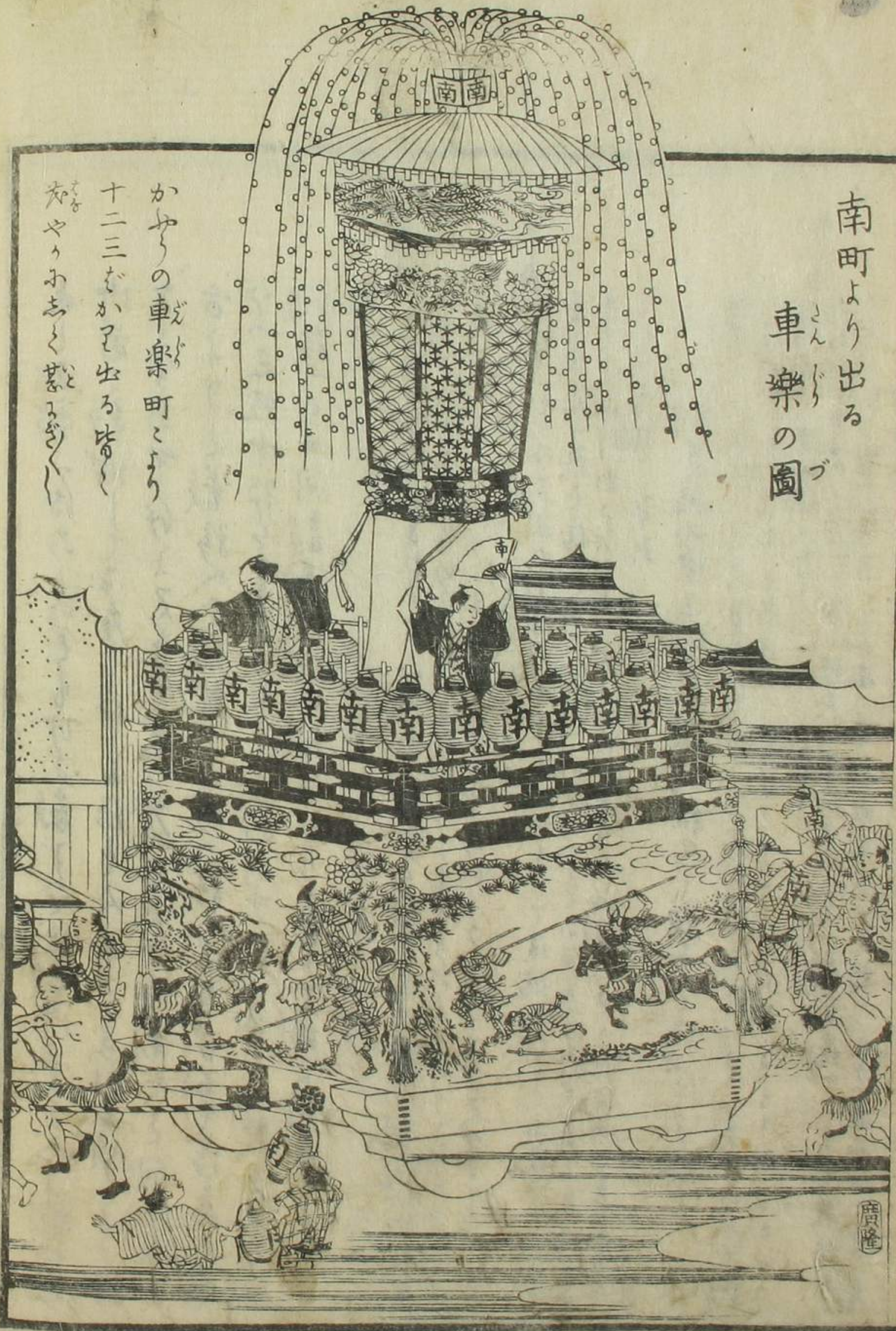
布<sup>等</sup>此<sup>外</sup>御<sup>願</sup>三<sup>昧</sup>堂<sup>調</sup>直<sup>僧</sup>六<sup>口</sup>同<sup>賜</sup>匹<sup>絹</sup>件<sup>三</sup>昧<sup>從</sup>成

手<sup>作</sup>布<sup>等</sup>此<sup>外</sup>御<sup>願</sup>三<sup>昧</sup>堂<sup>調</sup>直<sup>僧</sup>六<sup>口</sup>同<sup>賜</sup>匹<sup>絹</sup>件<sup>三</sup>昧<sup>從</sup>成





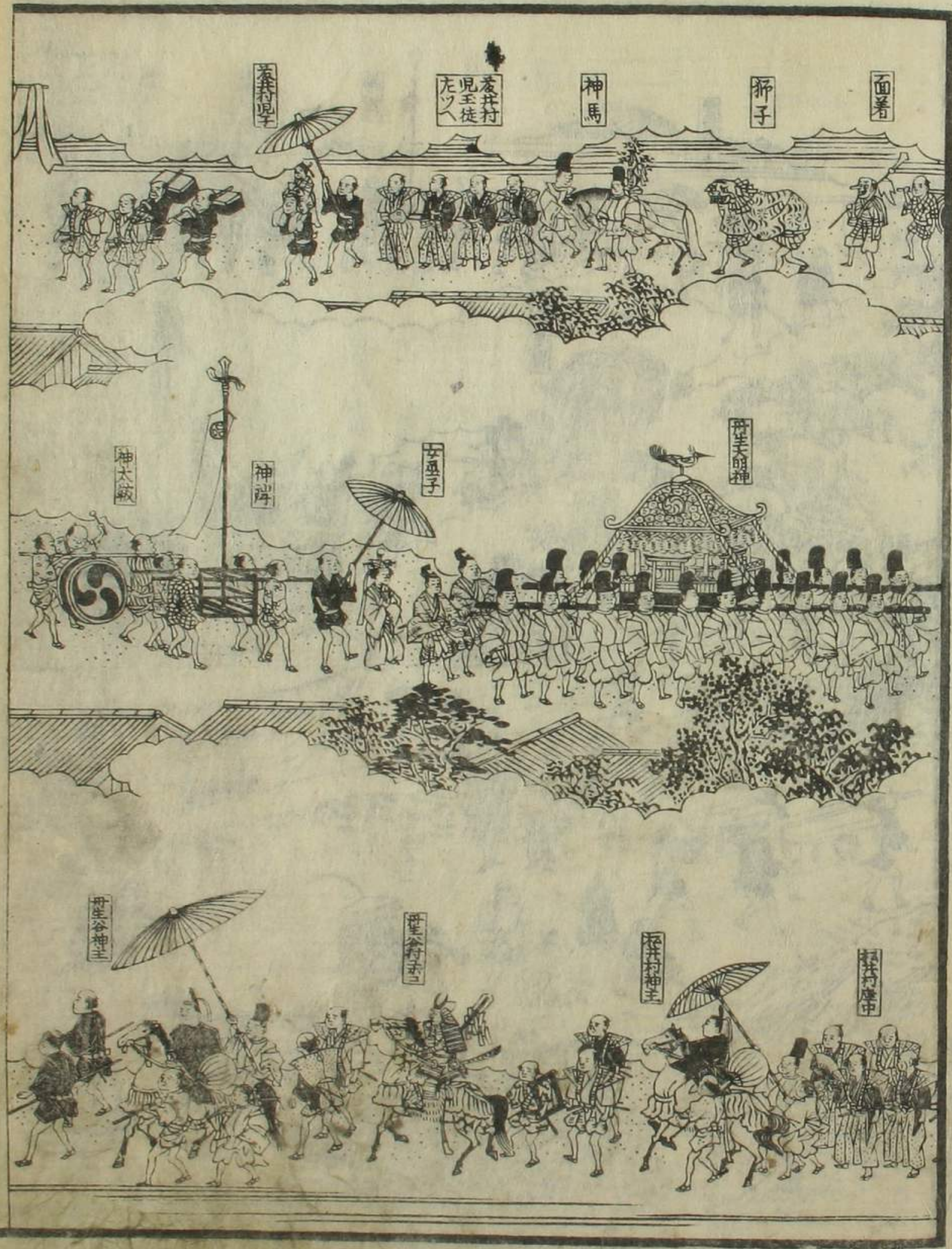
芳糕  
 火を  
 入て  
 涼や  
 林の  
 採焼云



南町より出る  
 車樂の圖

かやりの車樂町より  
 十二三むかへ出る皆  
 知やうふとせむさへ





其三  
鳥井阪  
御旅所

丹生大

丹生大





権屋や

くみはらうと妻の

教ふ汗

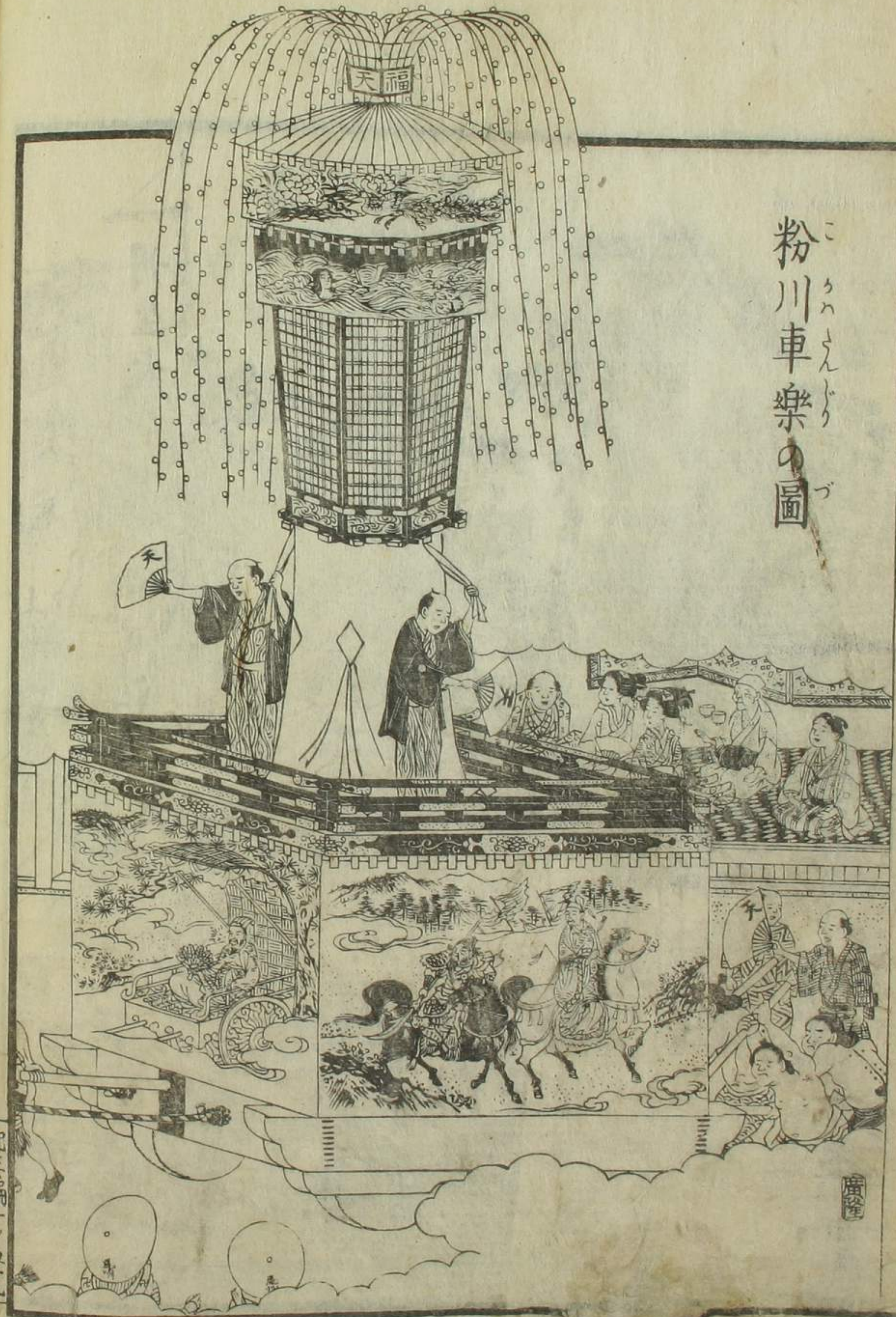
風登

たしと

そちうとあ

目々おふ  
洛 環珩菴  
子篤

粉川車樂の圖





乃又字一寺と一寺と一字ある古文字より後人の筆少く作る事多し

法のあらはれぬに成るにてもあつたの水のうらみあふ

志多し紅紫の洞の月もあれはなほむらや中をてん

ふまは玉葉集よ妙寺の教書乃沖秋とていふれりしをゆりし出

宗 融

○四所靈地 寛徳年中 仁範上人撰

○第一 光明地 金寺の東地なり古補陀乃觀音大智光

雲中よりそりてんをば神音月夜にまはぬりたり 中御門 権大納言宣顯

○第二 砥本地 金寺の東南麓林際なり地なり是幻大佛の孔子な

本がれし身をうらうて麻やうらうて森は名をて哉世の心 同

○第三 出現地 金寺西南二丁許より地なり大士を男侍者と化して池水を

音の清き姿成あつりし池のあれり世をひり 同

○第四 宝鐸地 金寺の東小川今の御堂乃地なり昔東大寺の尊光上人は

あのみは乃延とまはれひり 同

○粉河寺八景 享保比堂上十六人 侍等并一文あり

補陀曉鐘 粉河清流 風市桜花 紀川風帆

妹宵秋月 葛城晴嵐 高野積雪 淡嶋落日

○風猛山 粉河寺の後より 八景詞云

山を風猛と号し常郡乃名所なり花衣かざり死山より及くくと紀乃  
入道素志より志はるる後へる年その和秋あり又をふりてくやり入補  
陀を親喜乃清はかり西天光明園の海中に山をて海岸孤  
絶山と名づく也又ゆくやめりて高き神通人のまかたりしとあ  
又白花山白香花山とも葛草山やと在葛山とも金剛輪山  
ともいひたり山をとりてりしとて本尊をいへりてりてりてり  
を我朝乃よりくくやりてりてりてりてりてりてりてりてり  
公卿周梨を粉河生身名親音をその先よやのりてりてりてり  
も家とては清掃を奉き其東よりりてりてりてりてりてりてり  
中はよりりてり根柳ありてりてりてりてりてりてりてりてり  
五聖乃中より親音の園をうりてりてりてりてりてりてりてり  
婆の教體とあはせ給ひ危生と儼と海よりりてりてりてりてり  
こををてりてりてりてりてりてりてりてりてりてりてり

補陀曉鐘

從二位韶光

示現補陀歲轉溪山僧獨觀曉鐘音尚懸圓月一輪影  
照破人間塵翳心

亞槐通躬

花老山より河をゆく鐘はくさくさいふと世の憂いさめは

○粉川

源風狂山より出く粉河の肉を流きて大門ありて  
中津川小合流粉河の里中を流きて紀北川入る

八景詞云

おりのを那賀郡の名所なり昔より玉津の流ありて  
中津の南より大門乃下と出西川と合して居坂の邊と西へ松井と  
了柳とよむ紀の川入るそのと観音を男の寺と紀河長者の女  
子の寺といふなり粉河の里中を流きて紀北川入る  
よつて次のとよむ一衣流ひつて流きて粉河の里中を流きて  
乃河の傍に白粉流とありて白粉流とありて粉河の里中を流きて  
乃河の傍に白粉流とありて粉河の里中を流きて乃河の傍に  
乃河の傍に白粉流とありて粉河の里中を流きて乃河の傍に  
乃河の傍に白粉流とありて粉河の里中を流きて乃河の傍に

粉川清流

翰林學士爲範

塵纓堪濯寺門前法水悠悠横一川往昔清流浮白粉

佳名千歲遠相傳

紀三編一ノ五

黄門公福

乃河の傍に白粉流とありて粉河の里中を流きて乃河の傍に

太上天皇一昨日  
サ方臨筆

吉野之間明日  
サ方所有

乃河の傍に白粉流とありて粉河の里中を流きて乃河の傍に

乃河の傍に白粉流とありて粉河の里中を流きて乃河の傍に

十月廿九日

粉河寺の年中

奉書

予或直我以下内從進討事各三就果南に  
う袖軍忠於自責と申依功と云  
大層子と云今なる如きありは州

皇元年十月廿九日  
粉河寺の年中

奉書

粉河寺に蔵之古文書頗多其令楠其一之紙示  
好も老因撰下字様交阿寫之云 橋山一人

古戰場

寛正二年六月白鳥山尾浪守政長富山右衛門祐義就と粉河色にて戦ふ  
自戦と稱し其體を著しあまう代りて我死を中村が監守三十人皆死を  
我死僅く免まじく國城を備川といひ先より建徳元年小宇敷之氏徳敗  
軍して粉河より退く

猿園山

粉河寺の境内にあり長平氏居城の  
跡なり城跡東西一丁南北十間許

天照皇大神宮

粉河の大門の南にあり楠の大樹あり東家粉河の白  
木村の氏林あり猿園山の落石といふ別當大神と号す

鎌垣船

紀川の通船をり一僅  
垣ハ粉河色乃郷名なり

延喜民部式

年料別具雜物紀伊國

紙麻七十斤  
滋垣船九隻

鎌垣行宮址

粉河村の東畑の中より  
今ハ少々の形なり残り

續日本紀云

天平神護元年冬十月甲戌進到紀伊國伊都郡十八日乙  
亥到那賀郡鎌垣行宮通夜雨墮

御所芝

同村より行宮  
の東二丁なり

花山法皇白河法皇熊野御幸の時粉河寺より奉書あり

其時の假文乃跡といひ傳へ

祇王葬回

又葬の所は此の地なり

相傳へ祇王を於河の邊に葬りて其地を今に葬の因とて

死して因とありぬとて祇王此地より其親の因とて

牢獄の内小居りて由成立せしより其地を今に牢の内

といひ立すといふ又牢獄を今に其の母親より對面此を乞

ひて葬るを乞ひて所を今に葬回といひ傳へ祇王此地より

りて子孫傳へて今に傳曲と云ふなり

今も程長田中村に傳曲といふあり又中村に林氏支

配り小堂ありて傳曲とて祇王の墓といふ碑あり

籠祇王

是は紀州於河の河を流して其地は隣郷に林の河某といは傳へ敵味方

れらうとて其地を捕りて其地を捕りて其地を捕りて其地を捕りて

紀三編一ノ五

玉垣句頓宮

續日本紀云

神龜元年冬十月辛卯天皇幸紀伊國癸巳行至紀伊國那

賀郡玉垣句頓宮

高野

高野村の内にて鐵道二條より高野大和郡

湯山

湯山村の内にて鐵道二條より湯山

兒玉益通集

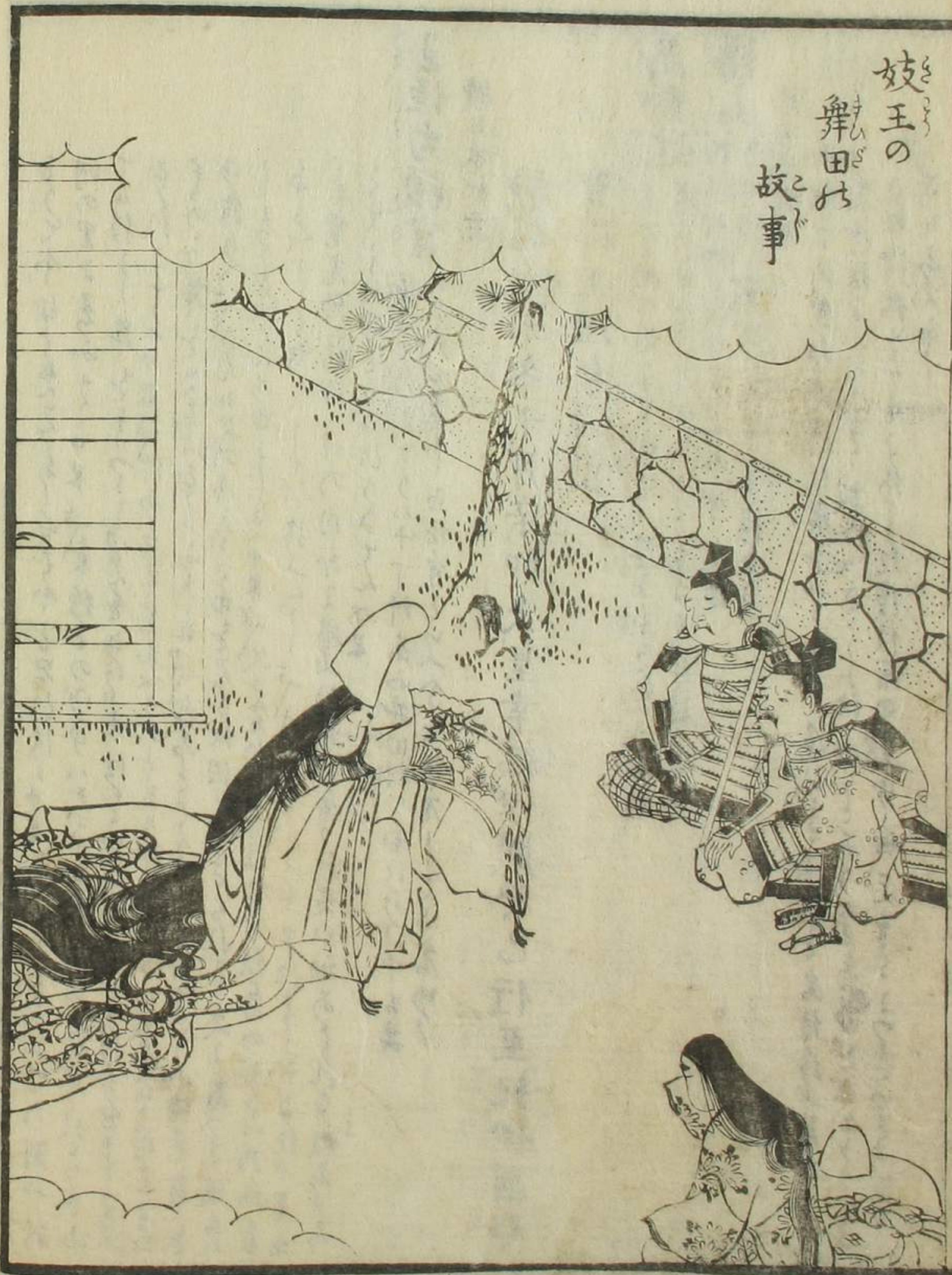
南紀公所老の湯山に居るをいふ湯山と名付ゆり益通と云ふ

湯山に居るをいふ湯山と名付ゆり益通と云ふ

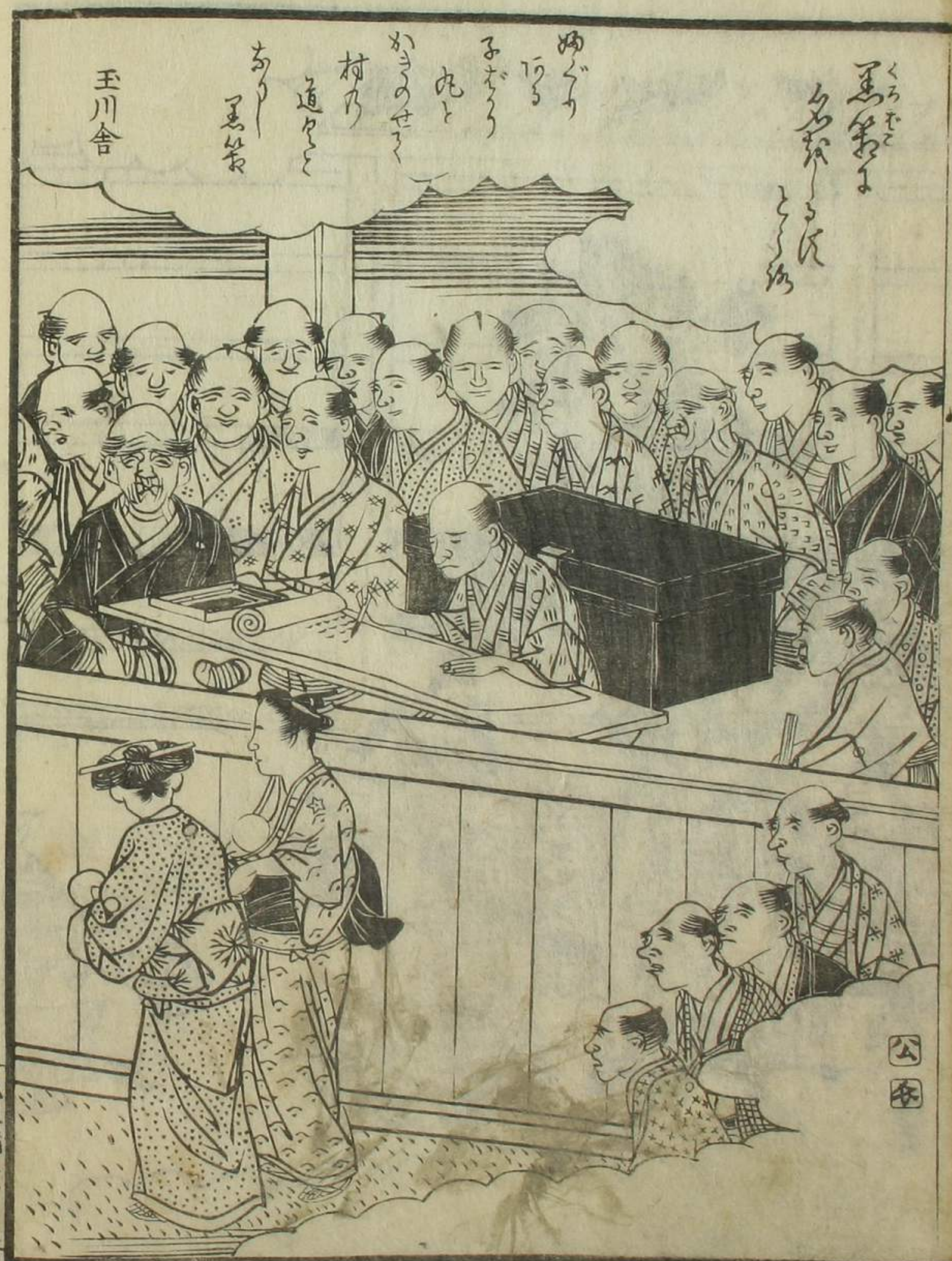


廣隆

妓王の  
舞田の  
故事



三  
一  
時



玉川舎

あり  
玉川  
道々  
村乃  
丸と  
かきのせき  
子さう  
何さ  
ゆがり

くろま  
馬車  
名取  
とく  
とく

紙三編一六五

公

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

若一王子社 附の口ヨリ

者無相遠可勤仕也此外致緩怠時者為寺家可有罪科之由依眾議下狀如件

文明九年丁酉六月七日

宿老年領 宗禪判 若軍年領 知範判

- 一和尚法印審等判
二和尚僧都聖尊判
三和尚僧都明義判

○黒箱

同社神官寺ノ... 黒箱 同社神官寺ノ... 黒箱 同社神官寺ノ...

左りあふん

永正十一年正月十一日 井 左ちろ五郎い子楠次希丸

永正十二年正月十一日 平内太夫い子乙石丸

永正十三年正月十一日

枚原い子ほり楠丸

井 夕孫をい子

入道丸

富士崎 富士の南より

紀川い子あふん 富士の南より 怪巖壁立以巖頭松樹多く遍蓋凌霄根と結  
び枝を擡つて臥しのぞみ蒼翠掬とべー東南に孤島あり  
長さ百歩許碧岸白沙奇勝かきとわり島乃例い富士石  
とて川中み特起せれ奇石ありかから富士岳い似とて富士  
寄と号し海とて流るる紀川の長流舟中此美景世間  
を第一とて

粉河寺八景の詞

粉河寺あり南二里すい紀川あり東より西小わが舟は約二十里むらり

紀三編下 空

あり和州より出づ紀城の雅水門とわが舟とつれあはれ  
く魚肥り漁翁免屠殺士の梓さ船人の長風帆をあげく  
あり漕つきてり紀川舟中よりは方をのぞみ南の岩に柳を  
ら成りてせ磯頭山吹おと百花くやもそそ細流あはれ  
をりて男女老若のこぞ想飲牧笛はまわ川面の系はるか

紀川風帆

羽林中郎將實全

千頃琉璃浸大虚紀川勝状一望初輕風吹送春帆影

花岸鷗洲畫不如

前八坐公長

ゆきと海も出づ船も紀の川風乃追風もらえ

木水奇勝序

巨鹿木村孝撰

意梅送香溪鶯操音日已亭午凭几而撫陰鬚偶為睡魔所  
魅歛然同諸君從小艇在水上篙之所撐丹崖翠壁傍  
堤遠洲回首瞻望嶺頭冬雪岸上春花斯須而舟鳥至頃刻  
而白雁來四時之佳景一船之壯遊或洗盞而酌或扣舷而  
歌每值一勝畫人畫之詩客詩之雜以國風之詠逸興之所  
發不覺叫使忽為小童所駭起俄然而覺暮鴉閃々返照紅  
斂夫木水之勝海內所共知而吾紀國之人味有文之者蓋  
非不能也慣見而未之奇也余也生其地亦復不得爾  
意者山川之靈其或欲便睡魔誘吾齋其勝歟由之觀之  
辭良有以哉嗚呼夢裡之清興睡後之歌詠不可不以記



藤寄

兩岸排闥走滄潔  
孤立芙蓉崑峭絕  
脚浴木川混々流  
上頭半腹不留雪  
魯峰山人

ゆきや  
浪のうね  
まのこ  
法



ゆきのね  
うねの  
まのこ  
又ゆきや  
まのこ  
白浪  
論栗山人



撥其佳境三十景以爲一帖題曰水奇勝遍請諸君詩畫  
之私答神靈誘我之意云其不求諸君而特以吾州人士  
者則欲便其知南中之風流亦足以文其境也

名子川

鎮西滿隆城址

本山大神宮

撥其佳境三十景以爲一帖題曰水奇勝遍請諸君詩畫  
之私答神靈誘我之意云其不求諸君而特以吾州人士  
者則欲便其知南中之風流亦足以文其境也  
丹生岩村西之川也源發於丹生  
下丹生岩村之町滿隆城址也  
本山大神宮 丹生岩村之町丹生岩村之神也  
當社丹生津比賣大神赤穗山乃布乞之上所より此  
地遷幸なる所里人ら社をまきつゝ夜殿とせしより大  
神天照小鎮坐しなまゐる後も其神靈を崇めて産去神  
と此村の名を丹生屋といふも沖夜殿を建し板子よ  
り起る所なるり其後粉河寺に鎮守を勧請せしより彼  
み對して本山といふ今も或りても彼地の祭礼に神輿渡  
河あり額を近衛某公の筆あり正一位勳八等丹生大明  
神と書し給り

光明院

本山の良れ方山と云ふ丁行よりある寺の奥段といふ寺に  
内務楓多き書ら傍房の形白雲多るびと秋ハ庫裡の意わありと  
文人墨客乃御ま

至一上人誕生地

西河系村か蔵明神の神より上人處といふあり處の中れ至一上人及至  
母の石塔あり各々二尺又寸をり中央に至一上人と書し  
永正九年七月廿一日と書し上人ハ隆倉の歸れといふも徳生の地をれを  
借書乃ありあり石塔を建しありんそ母の家由田氏近末傳り

釋尊寺

西河系村より

什物至一上人真影

珠勝の古画より上人を懸像をいひまゝ慈安  
元年九月東山園月禪師繪禱あり書押凡あり

馬宿村

街道のゆより最明寺附入道馬をとくありより村名あり

宇野若後守城址

市場村の良山より一町の若後守ハ  
天正年間の人あり書押あり

名子新藏人城壘

同村より新藏人の高山家の壘下  
永福の比我れ村より子孫あり

産物花子

猪宿村よりより一懸し味甚美なり形漆のありより  
合ありより一懸を以て他より極も時を待てをい

名子大明神社

伏村より伏小六社明神といふ名あり  
十一ヶ村の神より一懸自廣難あり

當社ハ丹生大明神八幡大神將場明神を祀り社殿多く  
建並び中央に將場明神乃親白石より紅圍造補任の時系師

よりの降臨当社に詣りて居候古例と云

又津川と云ふ或は志津川と云ふ源首城山之國嶽よりおろす伊勢郡に在りて  
穴伏川を流れて穴伏村ありて紀川に入家あり其の地を穴伏村といひ川を流るる  
國ふところを流るるの地といふ

古代國造讓補記

曆應三年八月廿九日爲丹生社志津川御解除經雄山川

邊著粉川宿九月一日乘燭時刻有志津川御祓新上於川

西向巽方御坐祓後流鮭内人殺其後改御裝束是系解より乃降臨の子

わたり敷代の  
式もか同し

菅原永津故居其地洋  
わたり敷

三代實錄云

元慶六年十一月己巳紀伊國那賀郡人主殿權助從五位

下菅原朝臣永津男七人女七人改本居貫左京四條

紀伊國名所圖會之編卷之三終

